第十一章　海原の國

一、古事記と書紀

古事記に須佐之男命をして統治せしむべく指定された國として『海原』の名が掲げられてある。此事に就いて少しく私の所見を述べなくてはならぬ。

古事記の記事は次の如くである。『伊邪那岐命、いたく喜ばして……天照大御神に賜ひて詔り給はく、汝命は高天原をしらせと……次に月讀命に詔り給はく、汝命は夜の食國をしらせと……次に建速須佐之男命に詔り給はく、汝命は、海原をしらせ』。と然るに書紀の本文には『諸再二尊共議して、天下の主者を生まんとして、日神大日靈貴、月神月讀尊を生む、並びに光華明彩なり、故に授くるに天上の事を以てす。次に蛭兒を産む云々、次に素戔烏尊を生む、勇悍安忍にして宇宙に君臨すべからずとて、遠く根の國に適ねとて之を逐

ひ給ひき』とあり、また同書に參照した第六の一書には『三子に勅任し、天照大御神は高天原を治すべし。月讀命は滄海原（アヲウナバラ）、潮の八百重を治すべし、素戔烏尊は天下を治すべしと宣ふ。此時素戔烏尊年已に長け、復、八握鬚髯を生じたるに、天下を治めんとはせずして、常に泣きいさち恚恨み給ふ。諸命何故に常に此く啼くかと問ひ給へば、對へて吾は母に根國に從はんと思ひて泣くとのたまふ。』とある。

二、久米博士の說

然るに我が古代史の權威久米邦武博士は、其記事の『海原』は新羅である事を主張して次の如く言つて居る。『かく、まち〳〵の傳へとなりたるは、海原が新羅なることの早くより晦くなりたるによる。是までの解者は根國を出雲とし、堅洲をば傍の洲など〻解して、三韓の本國なるを知らず。蓋し新羅の國は韓の東海岸にて、金城の港より北は元山まで巖石の海より峙ちたる處なるを以つて堅洲國といひたるなり。故に余は書紀の著者の異聞とせる第六の一書の記事を以て却つて事實を傳へたるものなりと信ずるなり。……故に第六の一書の『素戔烏尊は天下を治すべし』とあるは、諸尊が天照大御神の和德を喜びて天事を授け給ひ、而して素戔烏尊は勇悍强忍なるを以て、之に天下を治らせて耦神となし、賴りて以て國内を征服せんと思食して

の勅旨なりと思はる。』と。（註）

（註）久米邦武氏の『大日本時代史』古代上卷。

須佐之男命が、『天下を治すべし』と命ぜられたとしても、又は『海原をしらせ』と命ぜられたとしても、共れは本章に於て餘り重大な問題では無い。私は共海原が果して何れの國であるかを檢討すれば宜い。久米博士は海原が新羅であることを先天的に信じて居られる樣であるが、共れは甚だ牽絶附會の說ではあるまいか。若し韓國或は日本の傳說に新羅を海原と呼んだ例でもあるならば兎に角、海に非らざる新羅の國を何故に海原と言つたか、共理由は分らない。何の理由も無く唯だ自分の都合の宜い樣に歷史を讀むのは甚だ無責任と言はねばならぬ。

三、ペルシャ灣頭の『海の國』

然るにカルデヤ最古代史を讀むと、私が須佐之男命の故鄕だとするシュス（或はスサ）の都の南方を『海の國』と稱した。太古に於ては、彼のペルシヤ灣は今日よりは餘程西北方方面に深入してゐて、スサの都の如きも頗る海に接近して居たと云ふ。又今日のバスラ、コルナ等の都市地は尙ほ海底にあつたのである。そしてバビロン王朝の前紀に於て此海邊は廣い沼澤地を爲し、共地方住民の生活狀態も一特徵を帶びて居た。當時此地方を『海の國』と呼んだのも之が爲であつたらう。殊に私をして深い興味を感ぜしめるのは、バビロン人が此地方を『海の國』と呼ぶと同時に、又『叛逆の國』といふ綽名を與へたことである。海の國の攻擊によつてバビロン王朝の苦しめられ、又その領土を蠶食されたことは歷史の屢々記する處である。バビロン第一王朝は此『海國人』に依つて滅ぼされずして却つて彼のヒツチトに依つて滅ぼされたのであるが、兎に角『海の國』が一時非常な努力を持つてユウフラテスの上流に登つて來たことは事實である。

處が古事記神話に於ては、此『海原』を領地として與へられた須佐之男命が、大和民族に於ける最初の叛逆暴動者となつて居る。バビロンの古代史に於て、海の國が同時に叛逆の國の稱を受けたのと對照して見ると極めて興味が深い。そして久米博士とは反對に、書紀が引用した第六書の記事よりも、古事記の記事の方が、私には興味が深い。第六書の『月讀命は滄海原、潮の八百重を治すべし』との一句も矢張り古事記の『夜の食國（ヲスクニ）をしらせ』といふ方が面白い。文字の上から言つても、月讀命が夜の食國に向けられ、スサの男命が共スサの近傍なる海原に向けられたとする方が、趣味も深ければ、條理も立つて居る。

四、須佐之男命の叛逆

古事記の記する所によると『須佐之男命、命し給へる國を知らさずして、八拳須胸前に至るまで、啼きいさちき。其泣き給ふ狀は、青山を枯山なす泣からし、河海は悉に泣乾しき。是を以て惡ぶる神の音なひ、狹蠅なす皆滿き。萬の物の妖ひ悉に發りき。』そこで伊邪那岐大神はなぜ其樣に泣くかと問ふた。須佐之男命が『僕は妣の國、根之堅洲國に罷らむと欲ふが故に哭く』と答へるや、大神は大に怒りて之を追放して了つた。そこで須佐之男命は『然らば天照大御神に請して罷りなむと申給ひて乃ち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土皆震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして、我那勢の命の上り來ます由は、必ず喜ばしき心ならじ、我が國を奪はむと欲すにこそ』と言つて、女神は武裝して之を待つた。處が須佐之男命は一旦は言譯して女神の了解を得たので、玆に兄弟同志の二神で、彼の正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命其他を生んだ。それから須佐之男命の眞の暴動が始まる。卽ち『天照大御神の營田の阿はなち溝うめ、亦其大嘗きこしめす殿に糞まり散しき』といふ有樣で、益々暴動が烈しくなつた。此に於て、『天照大御神、見畏みて、天の岩屋戸を閉て刺しこもり坐ましき。爾ち高天原皆暗く、葦原中つ國悉に闇し、此に因りて常夜往く』の狀態を呈し、此に於て八百萬神の大會議が催されるのである。

カルデヤの神話創世記中には海の徵象たるチヤマトの叛亂が記されて居るが、更にバビロン時代に至りて『海の國』が同時に『叛逆の國』といふ別名を受けて居る。古事記に於ても、『此たゞよへる國を修理かためなせ』の神勅があつて、更に海原の國の須佐之男命の叛亂が序せられてある。まことに興味が深いと言はねばならぬ。チヤマト叛亂の一條に就いては、別章『三大創世記』の比較研究中に聊か所見を述べたから、本章に於ては、唯だ『海の國』に關する西洋考古學者の說を紹介して置く。

五、シヤルル・ジヤン氏の說

シヤルル・ジヤン氏（Charles Jean）は其近著『聖書の環境』（Le Milieu Biblique Avant Jisus-Christ）中に記して曰く『彼の有名なる改革者（ハムラビ王を指す）の死後、僅かに百年經つか經たぬ內に、卽ちシヤマシユ・ヂタナの下に、ヒツチトはバビロンまで降下して同都に掠奪を行ふに至つた。此入寇の爲の騷亂に乘じ、否な恐らくヒツチトの直接助力によつて、新らしい王朝、卽ち『海原の國』の王朝がニツプル（?）に創立された』（註）

（註）同書三三頁

六、レオナアド・キング氏の説

次に英國考古學の權威レオナルド・キング（Leonard King）氏は其著バビロン『Babylon』中に更に詳細な序述を記して居る。玆に其全部を紹介することは餘りに贅長に失するが故に、其重要な一部分を摘錄することにする。

『吾等は一種の確信を以て、サムス・イルナ（ハムラビ王の子、サムスは太陽の意ならん（石川註））の新らしい難事の原因を、當時ペルシヤ灣頭に興つた「海の國」の叛逆を指導し、バビロンに對して我が獨立を宣言したイルマ・イルムの行動に歸することが出來ると思ふ。サムス・イルナはこの新らしい敵に對して新たに動員令を發し、之に向はしめた。其結果として激烈な戰鬪がペルシヤ灣の沿岸に於て行はれた。後日の記錄によると、殺害された人體は海によつて運搬されたとある。然も尙ほ決定的の勝敗を見るに至らず、遂にバビロン人の挫折を以て終つた。思ふに王は、他の方面に於ける紛擾の結果、其叛逆を壓倒すべく充分の武力を之に注ぐことを妨げられたものであらう。何となれば其後二年間に彼はキスラ及びサブムの二都市を破壞し、バビロン國境內に於て其叛逆の頭領を破つた事實があるから。』

『イルマ・イルムはかくて、我地位を鞏固にするの好機會を得た。そして恐らく彼の勢力は南方バビロニヤに增加しつゝあつたに相違ない。其れは、テル・シフルに於て發見された文獻に、サムス・イルナの治世の第十年以後のものが一つも發見されないといふ事實に依つても明かに分る。ニツプルの中央都市が遂にイルマ・イルムの支配下に歸したといふ事實に徵すれば、彼は恐らく旣に北方に侵入し、又ラルサの都市をも含める南方スメルの地も亦彼の掌中に歸したことが想像される。サムス・イルナが其治世第二十年に於て顚覆したと誇記する「叛逆の國」といふのは、蓋し此海原の國を指すのであらう。』

『西方セミチツク人の移住によつてバビロニヤの受けた壓迫が、旣存住民の移轉を促したことは明白である。そして其進む方向は常に流を下るに在つた。其壓迫は其國土占領の後も尙ほ繼續した。而して之に對する唯一可能なる退却の道筋は卽ち「海原の國」であつた。されば此南方の沼澤地住人は隨分長い時期の間、避難スメル人に依つて增加されたことが想像される。そして此新王國卽ち海原の國の最初の統治者はセミチツクの名稱を持つて居るし、又セミチツク人であつたらうが、其後の統治者の名前によると、後に支配權を獲得したものは卽ち其住民中のスメル種に屬することが察せられる。』（註）

（註）King "Babylon" 199—202

サムス・イルマから五代目のサムス・ヂタナ王を最後としてバビロンの前王朝は滅びて了つた。其れから第二の王朝が興るまでの間には、他の地方的諸王國が興つたに相違ないが、未だ其證據は發見されない。そして今日知られて居る唯一の事實は、『海の國』の王朝が連續して居たといふことだけである。

七、暴動の事實は日本に行はれず

古事記神話に於ける須佐之男命の暴動事件は、此『海の國』のバビロンに對する叛逆を談り傳へたものではあるまいか。そして其歴史的事實に更らにカルデヤ古代の神話たるチヤマトの叛逆や、マルヂユク大神を主とした山岳大集會などを附加したものではあるまいか。

殊に注意すべきは、須佐之男命の暴動が『營田（みつくだ）の阿はなち溝うめ、亦其大嘗きこしめす殿に糞まり散ら』すにあつた事である。抑も此神話時代の日本や朝鮮に營田や溝や、大嘗きこしめす殿などが存在したことは思はれない。營田や溝やが神話中に織り込まれるには、それが其地方に非常に古くから行はれて且つ重要なる社會生活の要素であらねばならぬ。されば此樣な傳說が日本や朝鮮に起つたものとはどうしても思はれないであらう。然るにカルデヤは世界中最も早く米穀の耕作法と灌漑の爲の溝渠開鑿法との發達した國で、埃及の如きもカルデヤからの移住民から之を學んだのだと言はれる程である。されば此須佐之男命の暴動事實がカルデヤ地方に行はれたものと想像することは決して不自然ではないと思ふ。從つて彼の古事記の『海原』といふ地方は勿論久米博士の想像する如く新羅では無く、實にペルシヤ灣頭の所謂『海の國』であると解釋することが、最も學理的であつて、且つ之に依て極めて活々した事實を眼前に浮動せしめることが出來る。營田の阿はなちや、溝うめやは一種の農政革命と見ることも出來るが『海原』の研究には關係の薄いことであるから、玆に論じない。唯だ繰返して言ふ。太古に於て耕田法と溝渠開鑿法との最も發達したる國は、カルデヤであるが故に、彼の須佐之男命の事件が彼の地方に於て行はれた事實或は傳說の遠く日本まで談り傳へられたものと見るのが最も學理的であると思ふ。

最後に、當時『海の國』の叛逆に苦められたバビロン朝時代、代々の國王は『サムス』の名を必ず冠らされて居た。この『サムス』は卽ち太陽の意味であると思ふ。素神に對する天照大御神が太陽神であるのと思ひ合せれば、自ら合點されるであらう。

尙ほ最近佛國のルアジといふ學者が、この『海の國』に就いて大發見をなし、紀元前二千年時代に、この『海の國』に一大文化の開けたことを確認したと傳へられるが、未だその詳細を知ることが出來ない。

第十二章　高志の國

一、古事記神話の高志

古事記神話中に高志の國の記事が二ケ所ある。其一は須佐之男命が出雲國に名椎一族を助ける爲に高志の八俣をろちを殺したこと、其二は大國主神が高志國の沼河比賣の許に幸行した一條、是れである。そして其高志の國が所謂『越』の國であるといふことに日本の諸學者の意見は一致して居る。併し、須佐之男命の任ぜられた『海原』の國がペルシヤ灣頭にあり、出雲國が同灣オマン海峽兩岸にあると信ずる私は、其解釋に滿足し得ない。そこで私は、前の『古事記神話の地理』の章に於て其大體を叙述した故に、茲には單に其補充として些か所見を述べて見たい。

二、八俣蛇の記事

先づ八俣をろちの事から初める。古事記の文句は次の如くである。『出雲國の肥の河上なる鳥髮の地に降りましき。此時、箸其河より流れ下りき。こゝに須佐之男命、其河上に人ありけりと以爲して、尋ぎ上り往ましゝかば、老夫と老女と二人ありて童女を中に泣くなり。汝等は誰ぞと問ひ給へば、其老夫、僕は國つ神、大山津見神の子なり、僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂すと答す。亦汝の哭くゆえは何ぞと問給へば、我が女は本より八稚女ありき。こゝに高志の八俣をろちなも年毎に來て喫ふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣くと答白す。其形は如何さまにかと問給へば、彼が目は赤かちなして、身一つに頭八尾八あり、亦其身に蘿又檜榲生ひ、其長さ谿八谷、峽八峽を渡りて、其腹を見れば、悉々に常も血爛れたりと答す。』

此に於て須佐之男命は自ら名乘つて、其女との婚約を結び、其より大蛇退治の策を講じた。『足名椎、手名椎の神に告給はく、汝等、八鹽折の酒を醸み、且垣を作り廻ぼし、其垣に八の門を作り、門毎に八の佐受岐を結ひ、其佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其八鹽折の酒を盛りて、待てよと詔り給ひき、かれ告給へる隨

にしてかく設備へて待つ時に、其八俣をろち信に言ひしが如來つ、乃ち船毎に己頭を垂入て、其酒を飲みき。こゝに於て、飲み醉ひて死な伏し寢たり。爾ち、速須佐之男命其御佩せる十拳劍を拔きて、其蛇を切り散り給ひしかば、肥の河血になりて流れき。』

三、久米博士の說

是れに就き久米邦武博士の記する處甚だ興味があるから借用する。『八岐蛇は無論譬喩なり。此事は神武天皇の八十梟師を誅し、日本武尊の熊襲梟師を誅せられしと同じ例にて、當時は宴會に於て驍勇の者を斬殺すを、武勇の名譽となしたりしなり。……アシナツチ、テナツチは大山津見の一族にして、雲伯の地を領したる縣主なるべし。然るに冉尊（ナミ）の比より、北國より高志人侵入せしが、八岐蛇は其高志人の魁帥にて、簸の川の谿谷を占領して其縣主となれるものなるに、簸川の下流なる縣主の勢力弱くして每々采女を要求せらるゝに至りたるに因て、素尊これを援けて高志人の魁帥を斬夷し、因て雲伯の地を鎭定し給ひたるなり。云々』（註）

（註）『大日本古代史』上卷九六頁

四、注意すべき點

久米博士が八俣をろちの一條を以て北國人侵入の譬喩としたのは私も同意する處である。併しながら、其北國人、卽ち高志人を、何故に大蛇に譬へたか？　此處が傳說研究の興味ある問題である。勿論越や出雲にも蛇の居らぬことはあるまい。けれども恐ろしい外人侵入に譬へられる程の大蛇がかの寧ろ寒い地方に棲息したであらうか。我國本州には古事記の文章が形容した樣な大蛇は居ない筈である。然るにどうして此樣な比喩の材料となつたのであらうか？　是れが私の疑を挾む所である。

然るに私は前段に高志とは彼のカルデヤの東北方なるザグロス山に住居した『コセ』と稱する民族であることを說いた。而してコセ人の住するザグロス山が極めて險阻であつて、難越不可通の所であり、從て之に『越』の名を付するは極めて巧みなる命名法であることを說いた。又、前段にも述べた通り、ザグロは卽ちアラビヤ語のザガルより由來し、其ザガルとは、卽ち谿道の意味だといふ。古事記の文章が其八俣をろちを形容して、其長さ『谿八谿、峽八峽』と記したのは、恰もザグロス山其ものゝ形容の如く感じられて甚だ興味が深い。若し此傳說が斯くしてペルシヤ灣の邊りから傳はつたものとすれば、大蛇が侵入民族の徵象とな

つたのは誠とにふさはしいことであると思ふ。何となれば此地方は大蛇の多く棲息する處だからである。

五、興味ある歴史事實

更に興味ある歴史上の一事實は、此コセ人が自らは險阻なザグロス山中に立籠つて居て、そして屢々彼のペルシヤ灣頭の海原の國やバビロン等の富んだ地方に掠奪に出かけた、といふことである。シヤルル・ジヤン氏は其著『基督以前の聖書の環境』中に記して曰く、『ハムラビ王朝が凋落して約二世紀の後、「コセ人」は「海の國」を掠取した。――それに就いては多くの事は知られて居ない――彼等が其首都と定めたのは卽ちバビロンであつた。コセ人卽ちカシユ人（或はカシ）は其初めザグロス山中に住居したものである。其國は極めて磽确險阻ではあるが、併し防禦には安全で又容易である。此慓悍なる山窩等は遙かに其山を降つて豐饒なるエデンの地（メソポタミヤの地）に向ひ、其地方に掠奪して、急いで再び其難攻不落の隱遁所に獲利品を運搬するのであつた。紀元前十八世紀の終り頃、此カシ人は不意に幽蔭から出現した。そして彼等は尙ほ半野蠻であつたにも係はらず、其王朝をバビロンに建立することに成功した。』註）

（註）Charles-F. Jean "Le milieu Biblique avant Jesus Christ" 三三頁

六、大國主神の乘馬

尙ほ一つの事實がある。其れは、大國主命が高志國に行つて、さて倭の國に上る時に、御馬に乘つたといふ事實である。神話時代の日本に果して馬が居たかどうか甚だ疑問である。何となれば、日本の古代史には多くの戰爭の記事があるにも係はらず、此重要にして有力なる武器の一である馬が使用されて居ない。假令日本の國土に馬が棲息したにもせよ、其が人間の乘用に供せられない事は明かである。然るに古事記神話中にたゝぽつりと馬の記事がある。尤も須佐之男命の暴動の條にも『服屋の頂を穿ちて天の斑駒を逆剝に剝ぎて墮し入る時に云々』の文字があるが、是れは恐らく驢の事であらう。太古バビロン地方に於ても馬は棲息しなかつたので普通の運搬や勞作や乘用には牛や驢が採用されたのである。屋根に穴を明けて墮したのが驢ならば想像されるが、馬では小々大き過ぎる。セミチツク人の使用する驢は極めて小さく、犬の少し大きい位にしか見えないので、あれなれば屋根の上に持つて行くことも出來るかと思はれる。然し其れは兎に角、日本の太古には乘用に供せられたことの無い馬に大國主命が乘られたといふ一事が私の興味を引く點である。此事は大國主命が『高志國の沼河比賣（ぬなかはひめ）を婚ひに幸て行し時』の記事である。卽ち『其夜は曾ずて、明る日の

夜、御合ひし給ひき、又其神（大國主）の嫡后、須勢理比賣命、甚く嫉妬し給ひき。かれ其日子ぢの神わびて、出雲より倭の國に上りまさむとして、束裝し立たす時に、片御手は御馬の鞍にかけ、片御足は其御鐙に蹈み入て云々』とある記事は、高志から出雲に、出雲から倭の國へ、の途中の物語である。抑も何故に此處にぽつりと乘馬が現はれたものであらう？　此點に注意すべきである。

七、コセ人は乘馬民族

バビロンの古代史を讀むと、バビロンの文明國にも馬は無かつた。物を運搬したり引いたりするには常に驢や牛を使用した。そして此文明國バビロンに初めて馬を輸入したものは、彼のザグロス山中から出て來た『コセ人』であつた。倫敦大學のアツシリオロジイの權威キング氏は言つて居る。カツシト（コセ人）は高い文化を持つて居た譯では無く、バビロンを統治するに至つても自ら徐々に其文明に應化したのである。『併し、物質的方面に於ては、彼等はバビロンの生活に大變化を齎らした。其れは彼等が馬を輸入したことに基く。彼等が畜馬の人種であつたことは疑無く、而して彼等の侵入が成功したのも其大部分は之に依つて敏活な運動力を有したことに基因する』と。（註）

（註）King "Babylon"

セミチツク人は、殊にアラビヤ人は乘馬民族として世界に有名であるが、右の記事によれば、彼等は之を『コセ人』から學んだものである。果して然らば、大國主命が高志卽ち『コセ』の國に其乘馬を得、又學んだものと解することは極めて自然では無いか。古事記に、大國主命が高志國に旅した事件の中に始めて乘馬の事を記したのは深い理由がなければならぬ。

以上の諸事實を綜合して見ると、古事記の高志國とはザグロス山中の『コセ』人の國といふ意味だと解することは强ち牽强附會の說ではなくなるであらう。

弄日臨淡坐。　尋花遶寺行。
時々聞鳥語。　處々是泉聲。

第十三章　天孫民族

一、ヒツチト民族

私は天孫民族を以て、舊約聖書に出て居るヘト或はヒツチト人種なりと信ずる者である。なぜか？　私は今、說明の順序として、先づヒツチトとは如何なる人種なるか、といふことを西洋の學者の言によりて解說し、次で我が古事記の記事に對照して私の主張を證明して見たい。

碩學エリゼ・ルクリユは曰く『此地方（小亞細亞東方）の傳說及び歷史の傳ふる處によれば、其歷史開闢期（プロトヒストリック）即ち今より三千五百年前に於て、シリヤ門戶の東隣地ユウフラテスの谿流、及びシリヤの地を占領した人種は、今日シリヤに住するセミチツク人種と甚だ相違する處のヒツチト人、即ち埃及人の所謂カチ人であつた。セイス氏の說によれば、埃及の彫像に現はれたるヒツチトは、今日の蒙古人種に類似の相貌を有し、皮膚は黃色、眼は黑色、頭髮は三筋の長き編下げ、或は剃れる頭の中央に一總の毛を存し、鼻は逞ましき兩顴骨の間に前方に突起し、額と頤とは共反比例に後方に退落して居る。』（註）

（註）『地人論』第二卷二八頁

『其は兎に角、此セミチツクならざる人種が、如何にして、如何なる事變の結果として、西方亞細亞の此地方に定住するに至りしか、之れはまだ詳かにされて居ない。被服の狀態や、爪先の尖起した靴の形狀や、母指のみを分けた手袋等に依りて判すれば、ヒツチト人種は久しき時代をカパドシヤ地方に經過したことが想像される。……ヒツチトの形象文字にては、國或は王といふ意味を現はすに「尖柱」の形を以てするが、其れは同地方のヒツチト人住家と其形狀を同じうする。』（註）

（註）『地人論』二卷三〇頁

又佛國ラルウス辭典の記する處によれば、此民族の名は、最初バイブルの記事によりてのみ世に知られたのであるが、近時發見せられし埃及やアツシリヤの古蹟によりて漸く其歷史を知らるゝに至つた。『ヒツチトは太古の時代よりユウフラテス及びハリスの上流に住したもので、其國語及び人種は未だ學者の說明し得ぬ處である。カルデヤの最初の統一者は之を一時統治した。二十年後、十八代目のフハラオンは彼等に貢を科した。ツトモス三世の代に、彼等はトオリユス山の咽喉及びカパドシヤ高原を占領した。其文明は多くカル

ヒッチトの浮彫
紀元十一世紀に於てアイシタブの記錄せられしヒッチトの浮彫

デヤの感化を受け、些か剛硬の性質を帶びて居た。外人間交通の仲介を其職業とした。嵐や雲や泉を司る第二義の神を崇拜した。其パンテオンの元首は、或は月であつたかも知れぬ。之を『カチ』と稱する。カチはパンテオンの元首にして同時に國民の祖父と見做された。サパルル王の世にはシリヤのオロント河流域全部を征服した。更にユウフラテス河及びカブウルの間を領し、アツシリヤと國境を接するに至つた。紀元前十四世紀の中葉、ハルムハビ及びセチ一世は其南進の策を中止した。カトウサル王は、埃及王ラムゼス二世の治世第四年に、之に宣戰した。其翌年、カトウサルは戰に敗れたが之に屈せず、二十一年に埃及と平等の和約を結んだ。そしてラムゼス二世はカトウサル王の女と結婚した。其後、小亞細亞の人民の侵入に遭つて大打擊を受け、ラムゼス三世の救助に依りて之を免れたが、併し其國は再び古の隆盛には復らなかつた。アツシリヤの壓迫を受けて、之に五十年間貢を獻ずることを餘儀なくされた。そして自ら其封建制を改めて、聯邦制度を設くるに至つた。けれどもアスシユルナジラバルが攻寄せた時は、既に抵抗力を喪つて居た。希臘のアレキサンドル大王が來た時は其強大國は痕跡も無くなつて居たらしい。

以上の記事によりて、讀者は、現代の學者がヒツチト人種に就いて有する大體の智識を知ることが出來たであらう。然らば何故に私は此ヒツチト人種が卽ち吾天孫民族であると言ふか。

之に答へるには、私の古事記神話の研究全部を解說せねばならぬが、玆には特に他の部分と重複せざる點

に就いてのみ説明を付して置く。即ち第一、天照大御神の嗣子天忍穗耳命の名がヒツチトたることを連想せしむること。第二、ヒツチト人種の岩屋生活は天孫民族の共れに酷似すること。第三、メソポタミヤ即ち葦原の中國を目的の地とせる天孫民族がユウフラテス河の上流、高原地方に住せしものとせば、共れが直ちにヒツチト人種では無いかと、何人も考へること。第四、古事記中に語られたる『八咫烏』はヒツチト民族の崇拜物と思惟さるゝ『兩頭鷲』に酷似すること。第五、天孫民族が葦原の中國に降下せずして却て筑紫の日向の高千穗に行ける事實は、ヒツチト民族がオロントの谿谷を降りてヘブロン山の麓に至りたる事實に參照して地理上歴史上の多くの符合點を有すること。第六、ヒツチト人が自己の憧憬する諸王や祖國を記するに『柱』を以てせる事實は、吾古事記が神々を數ふるに『柱』を以てせるに等しきこと、等を些か細述して見たいと思ふ。

二、天忍穗耳命

天照大御神の嗣子、天の忍穗耳命の名稱に冠らされたる『正勝吾勝勝』の語は、正しく其ヒツチト人種即ち『カチ』人種たることを想はしめる。さて古事記に『豐葦原の千秋の長五百秋の水穗國は、我御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らさむ國』又は『此葦原の中國は、我御子の知らさゝ國』等の文字があつて、天照大御神が葦原の中國の統治者と指定し給ふたのは即ち忍穗耳命であつた。そして此天孫民族最初の元首たる忍穗耳命の名に『正勝吾勝勝』の一句が冠らされて居る點は深く注意すべきである。私の讀んだ『古事記讀本』（加藤高文氏著）には、此『正勝吾勝勝』の文字を、『アサカ、アカツカチ』と讀ませて居る。或は此冠詞は『アサカ、アカツ、カチハヤヒ』といふ風に讀むのが舊來の習慣かも知れぬ。他人はどう讀んでも、かまはない。私は私の讀方で、之を『マサカチ、アカチカチ』と文字通りに發音する。そして此冠詞の意味を私は『正統のカチ、吾がカチカチ』といふ風に解釋する。

アツシリヤの古蹟によりて、同國人がヒツチト人を『カチ』と呼んだことを知り得るに至つた。埃及の古墳發堀によりて、同國人がヒツチト人を『カチ、カチ』と呼んだといふことが分つた。然らば、忍穗耳命の名に冠らせるに『正統のカチ、吾がカチカチ』の語を以てせる天照大御神の語は、極めて重大なる意義を有すると思ふ。抑も太古ヒツチト民族の國家組織は一種の封建制度を成して居たと學者は言ふ。然らば此の社會には數多きヒツチト人の同族或は諸侯が諸處に散在したに相違無い。そして天の忍穗耳命の當に下方國に移住せんとするに當りて『吾は正統のカチ族なり』或は『カチ族の本家なり』と宣したのは極めて自然の行動と言はねばならぬ。又其威風堂々たる樣が追想されるのである。

第二十一圖　ルクルゴンデンスモのプラツクヒッチ——
典古の一唯るれたか書て以をと語リシリヤアと語ト

然るに此處に疑はるゝ一事實がある。其は古事記神話中に、對埃及大戰爭の記事及びラムゼス大王との結婚の記事が些かも存在せぬことである。若し吾が天孫民族がヒツチト人種なりとせば、此民族の危急重大事件たる是等の事件が、古事記中に記されぬ筈が無いといふ疑問の生ずるは當然である。抑も之れはどう解釋すべきであらう？私の考へでは、天孫民族たるヒツチト人の下降移住は、此大戰や結婚事件よりも遙かに以前に行はれたと解釋せねばならぬ。

抑も一民族が、四邊の諸民族と異なつたキヤラクターを造り、獨立の國民性と、獨立の主權を樹立するには、可なりに長い年月を要するものである。日本は今や世界列强の間に挾まれて獨立の一强國となつて居るが、之れには二千年間の準備が費やされて居る。ヒツチト民族がトロイ戰爭に同市救護の爲に出征せし時代（註）及び埃及王ラムゼス大王と對戰した時代には、同民族の國は既に一大帝國を成して居た。小亞細亞一體の山村、殊に其東方カパドシヤの地に於て、今日まで其文明の蹟を遺せし此國民は、彼の大帝國建立までに少くとも一二千年の時日を此地に費やしたであらう。或は更らにずつと古くから此高原に定住して居たかも知れない。

（註）G. Maspero "Histoire ancienne des peuples de l'orient" 二九一頁

更に私は、彼のセミチツク人種よりも先きにメソポタミヤに來住したるアツカヂア民族が、或はヒツチト人種と其起原を同じうしはせぬかと考へる者である。此アツカヂヤ人は、今より六七千年前に北方山岳地方から移住して來たものである。そして此時代の記錄によると、バビロニヤは『ケンジ』或は『ケニ』と呼ばれた。其意味は『溝と葦との國』といふ意味である。更に之を古事記流に言へば『豐葦原の水穗國』或は『葦原の中國』となる。『ケンジ』は『ケニ』或は『クニ』と變ずることは日本人の發音法に常に見る事實である。大クニ主神とは卽ち『大水穗國主神』といふ意味になる。此大國主神と交渉したる時代のヒツチト人卽ち天孫民族が、對埃及戰爭を知らないのは當然である。又、古事記の記する處によれば、此兩民族は血統を同うするのである。

アツカヂア人がヒツチトと同人種なりや否やに就いては、從來西洋の學者は少しも注意を拂つて居ない。併し天孫民族を以てヒツチトなりと考へる私にとりては、此問題は重大な意味を有するが故に、些かばかり說明を試みる。併し之に就ては、大國主神の說明に際して詳論する積りなれば、玆には多くを言ふ必要が無いと思ふ。學者の說によると、アツカヂヤ人は北方の高原から降下した者で、其言語は今日のウラル・アルタイ地方住民の其れに酷似して居ると言ふ。唯だヒツチト人の徵象的文字は今日尙ほ學者の了解し得ぬ處であるが、アツカヂヤ人の楔形文字は、今日漸く學者の解得する處となつて來た。此文字の相違がある上に、アツカジア人のメソポタミヤに現はれた時代と、ヒツチト人の大帝國を成した時と非常に年代を異にして居る。併し其年代のことは前にも述べた通り、解釋がつかぬことも無い。ヒツチト帝國が四方に雄を揮つた時には、既にカルデヤの文明を能く消化して居つたのであるから、既に其以前に於て彼等は久しく獨立の一民族を成してユウフラテス發源地方に定住して居たに相違ない。又、カルデヤの最初の統一者は此ヒツチト民族を自ら統治したとのことであれば、其以前に於て既に一民族を成して居たことが想像される。されば彼等は、アツカヂヤ民族と同時代或は前後して、北方アルタイ地方或はカスピヤン地方から移住して來たものかも知れない。

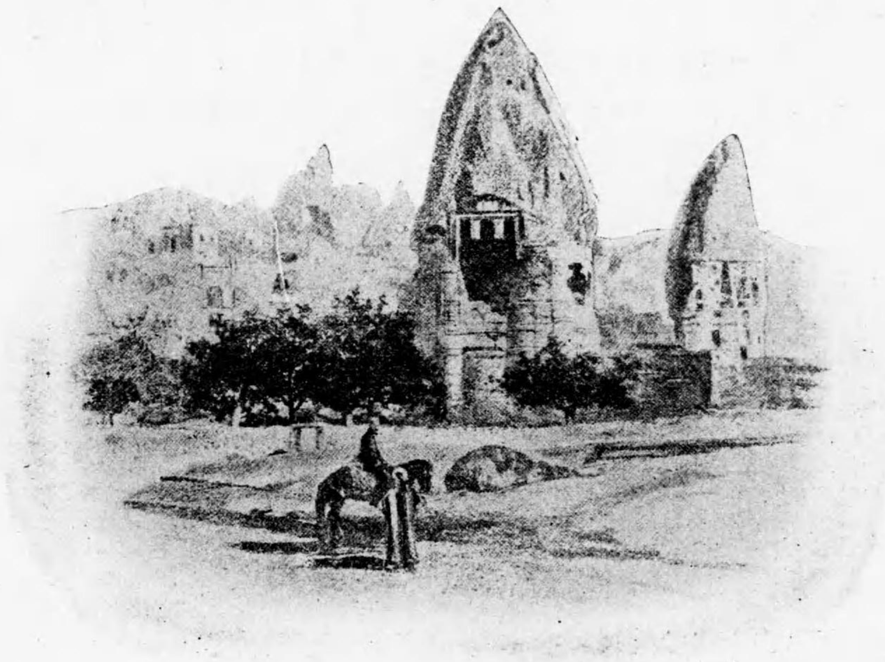
又、學者の說によると、アツカド人の使用した最初の文字は矢張一種の徵象文字であつて、其れが年を經るに從つて變化して來たのだといふ。唯だアツカヂア人の使用したる徵象文字が果してヒツチト人の其れと同樣のものであるか、どうかは私の獨斷し得ぬ所である。併し私の考へる處では此兩者の間に多く共通の點が有らうと思はれる。又、さう主張する學者も尠くないのである。（註）

（註）本書第二章參照

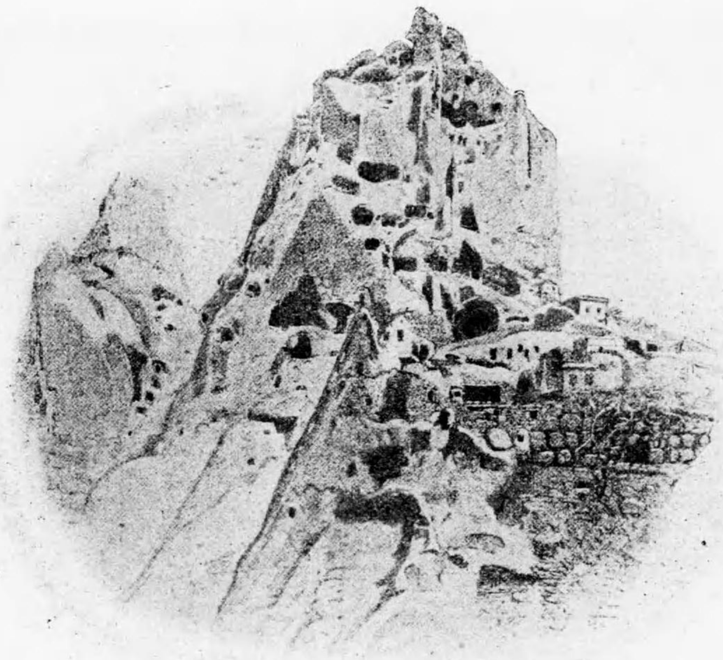
アツカド人がヒツチト人と同種族であるか否かといふことは、私の主張の全體に對して可なり重大な關係を有するが、今は唯だ、天孫民族移住の年代がヒツチト帝國對埃及戰爭よりも遙かに以前にあつたことを知れば足るのである。そして『正勝吾勝勝』の語を冠らされたる天忍穗耳命の名は、卽ちヒツチト民族首長たることを證明するものだ、といふことを了解し得れば足るのである。

三、岩屋戶生活

ヒツチト人種の岩屋生活は天孫民族の其れに酷似する。エリゼ・ルクリユは曰く『カパドシヤに於ては、今日尙ほ、彼のイブサンビユルに於けるヒツチトの岩屋と同形のものを發見する。アルゼー山の西麓、廣大なる地域に亘りて、或は圓錐形丘中に、或は凝灰石の絕壁や傾斜面に存する夥だしい穴居の跡は卽ち是れヒ



第二十二圖—カパドシヤの岩戸生活——ウルギユブ近傍に於ける一村落



第二十三圖—カパドシヤの岩屋生活——ウチ・アサルのシヤトオ

ツチト人の作業であつたらう。此ウルギユブ地方に無限の迷宮を成す所の驚くべき大岩窟は少くとも今より三千六百年前に建設せられたものと言ふことが出來る。』三千六百年といふと最小限度の計算で、或は其れが四千年五千年若しくは六千年の太古にあるかも知れない。そして彼の古事記の天岩屋戸大會議の一條、八百萬神大評議の一條は、之をユウフラテス上流高原地の事實と見れば、種々合點さるゝことがある。

四、ハラン民族

メソポタミヤ、卽ち葦原の中國を約束の地とする天孫民族の本據が高天の原、卽ちユウフラデス上流の高原地にありとせば、其高原ハランの地方に一國を成せるヒツチト人が天孫民族と同族では無いかと思ひ及ぶのは決して無理では無い。メソポタミヤが葦原の中國なること、ハランの地が高天の原なること等の論證は之を神話の地理的研究の章に讓るが故に玆には略す。

アツカド人がカルデヤのスメル地方を唯だ『ケンジ』或は『ケニ』と稱したことは前に述べた。古事記のクニツ神とは卽ちケンジ卽ち水穗國の人民或は首長といふことであらう。そして此國神に對立する天神は、卽ち高原住民といふ意味であらう。そして太古西方亞細亞の高原住民が競ふてメソポタミヤ豐饒の地を占領せんとしたことを思へば高天原の住民卽ちハランの住民が、『ケンジ』卽ち『水穗國』を約束の地として此處に達せんことに努力したのは極めて自然である。

五、八咫烏と兩頭鷲

古事記は天孫民族の一種の守護神として『八咫烏』のことを記する。而して此八咫烏は、ヒツチト民族及び其諸王の紋章たりし『兩頭の鷲』に酷似して居る。碩學ルクリユは其地人論中に曰く、『エウユクの岩石上に刻まれたる兩頭の鷲は卽ちヒツチト民族或は其元首等の紋章であつた。此殺戮破壞の狂暴的徵象は、彼の聖地克服に出陣せる十字軍騎士等に對して深刻なる印象を與へ、以て歐洲二大帝室をして之を其家紋のモデルとして採用せしむるに至つた。』二大帝室とは、蓋し露國のロマノフ家と普のホーヘンゾルレン家のことを言ふのであらう。

古事記の註釋者は『八咫烏』を以て『八頭の烏』だと解釋する。奇妙な說である。兩頭の鷲が存在せぬ如く、八頭の烏も實存したものでは無い。いづれも己が崇拜物を誇張して言ひ或は描いたものに過ぎない。兎に角、兩方ともに烏を崇拜した證據として見れば蓋し大過無きを得るであらう。そして此兩民族の信仰の符

第二十四圖　ヒツタイトの浮彫——兩頭鷲

合する點こそ私の論旨に些かの證據を與へるのである。

六、天孫降下の道筋

天孫民族が其本來の約束の地たる葦原の中國に到達せずして、却て筑紫の日向の高千穗の峰に天降りたる事實は、ヒツチト人移住の事實に能く符合して居る。

ヒツチト民族はバビロンの有名なハムラビ王が死んで百年經つか經たぬ内に同國内に降下して、その首都に掠奪を行つた。その騷亂に相應して新らしい王朝卽ち『海原の國』の王朝がニツプル(?)に創立された。それから埃及との戰爭が起り、カルデヤ征服者たるアツシリヤ人の壓迫を受けるに至つた。さればかの大帝國を成せる當時のヒツチト民族がカルデヤ文明の感化を受けたことは勿論であつて、彼等の間には既に其以前に於て種々なる交渉があつたに相違無い。そして大國主神と天孫民族との交渉事件は卽ち此間に行はれたる事實を物語るものでは無いか。併し古事記の記者は天つ神が何故に、葦原の中國に行かずして却て筑紫に赴いたか、其理由に就いては少しも陳べて居ない。その點はヒツチトとアツシリヤとの關係の歷史の方が明白に知られてゐる。卽ち、ヒツチトは、アツシリヤの妨害によつて、メソポタミヤ降下を遂行し得なかつた

のである。

要するに、ヒツチト人も、天神達も、土地豐饒の水穗國たるメソポタミヤに行かずして、却て南進の策を樹てたことは事實である。そしてヒツチト人は遂に埃及大王國と衝突することゝなつたのである。併し、此埃及王國と衝突してシリヤの平原で大戰爭を行ふまでには、此兩國民間に隨分長い紛爭が行はれたに相違無い。一民族の興亡に關係する程の大戰爭が起るには、相應に深い理由が無くてはならぬ。ラムゼス二世が兵をシリヤの野にまで送るには其處に非常な理由があつたに相違ない。卽ちヒツチト人が深くパレスチンの奥までも入り込んで勢力を揮ひ始めたからであらう。吾が帝國の滅亡に先立ちて、ヒツチトの一群は旣に死海の西方へブロン山の麓に居を定めて居たといふ。されば、彼等は旣に此パレスチン南方を跋涉して居たことが想像される。

古事記の記者は、天孫民族降下の事實を記して、『天津日子ホノ、ニニギノ命、天の石位（イワクラ）を離れ、天の八重タナ雲を押分けて、イツノ、チワキ、チワキて、天の浮橋に、ウキジマリ、ソリタタして、筑紫の日向の、高千穗のクジフルタケに天降りましき』と曰ふて居る。是れ此記事がヒツチト民族移住の狀況に酷似して居るのが尊い處である。

右の記事を飜譯すると次の如くなる。卽ち、天照大御神の孫、ニニギノ命は、高原岩窟の故鄕を去つて旅立した。雲霧を押分け、山道、野道を彷徨し、河を過ぎり、湖水を渡り、遂に筑紫の日向の高千穗に着いた。更に實際の地名によりて言へば、ハランの高原地方から降つて、シリヤのオロント谿流を辿り、レオント河ジヨルダン河の岸に沿ふて南に進み、更に死海を渡り、エドムの地を過ぎて遂に高千穗の蜂を存するシナイ半島にまで達したのである。若し夫れ、シナイ半島を形成するジエベル・エル・チフが卽ち高千穗なることに就いては、之を地理的研究の章に讓る。

七、『柱』の語

西歐諸學者の說によると、『ヒツチトの徵象文字にては、國或は王といふ意味を現はすに「尖柱」の形を以てする。』といふ。然るに驚くべきは、吾天孫民族も亦其祖先諸神及び國王を記するに『柱（はしら）』の語を以てする。ヒツチト人が自己の憧憬する諸王や祖國を表はすに『尖柱』を以てするのも、天孫民族が其崇拜する諸神を呼ぶに『柱（はしら）』の語を以てせるのも、其習慣の起原は之を同じうするのかも知れない。ヒツチトの徵象文字の『尖柱』は其岩窟の住家を具體したのであらうと學者はいふ。其れはさうかも知れない。併し其形象の『尖柱』は祖國や國王を示すと同時に遂に柱其ものをも意味する樣になつたかも知れない。そして古事記には諸

第二十五圖　ヒツチト文字を彫刻せる石片

神を數へるに幾『柱』の語を以てする樣になつたのかも知れない。

『此二柱の神はみな獨神なりまして云々』『上の件五柱の神は別天神云々』等の語は古事記中に屢々見る處であるが、何故に此『柱』の語を以て諸神を數へしや？　其理由に就いて國學者は多く說明して居ない。

八、天孫と猿田彥神との關係

天孫ニニギの命が降下する時に十字路に到つて道案內をした重要人物がある、それは卽ち猿田彥神である。古事記には次のやうに記してゐる。

『こゝに日子番能ニニギノ命、天降（アモ）りまさむとする時、天之八衢（ヤチマタ）にゐて上は高天原を光し、下は葦原中國を光す神こゝにあり。

『かれこゝに天照大御神、高木神の命もて、天の宇受賣（ウズメ）神に詔り給はく、汝は手弱女（タワヤメ）なれども、伊牟迦布（イムカフ）神と面勝（オモカツ）神なり。故專ら汝往きて問はむは

『吾御子の天降りまさむとする道を、誰ぞかくてをると問へと詔り給ひき

『故問はせ給ふ時に、答へ白さく、僕は國神、名は猿田毘古神なり。出でをる所以は、天神の御子天降り

ますと聞きつる故に、御前(ミサキ)に仕へ奉らむとして、參向へ侍ふぞと白し給ひき。』

かくて天降りたるところは葦原之中つ國ではなく筑紫の日向の高千穗の久士布流多氣(タケ)であつた。右の文意によると八衢卽ち十字路に到つて天孫一族は猿田彦神に會ひ、一時大いに警戒した樣が見える。然るに猿田彦神の態度が極めて從順であつたので安心して、その道案内に從つたのである。ウズメノ神に汝は女なれども强くて負けぬ氣の人間だから、行いて問質せよと命じた點は、その場面を想像せしめる。それは丁度當時勃興して來たメソポタミヤのアツシリヤ人に對するヒツチトの關係を物語るものである。そして遂に葦原之中國に降下し得なかつた事情を右の記事の心理狀態でかすかに想像することができはしないか。

九、猿田彦神はカルデヤ人なり

葦原の中國がメソポタミヤなること、天孫民族がヒツチト人なることを證明すべき間接の論據として、私は猿田彦神のことをも玆に呈出して置く。私の考えでは猿田彦神はカルデヤの一貴族或は其民族である。カルデヤ人はカルド或はカルダと呼ばれ、カルダは亦サルダと發音される。カルデヤ人の植民地たりし伊太利西方の小島をサルヂニヤと呼ぶのも其一例である。カルデヤのニニブ城主で有名な王樣にサルダナパルといふ人があるのも亦意味ありさうである。殊に航海術に長けて交通事業に慣れたる此カルデヤ人の猿田彦神が天孫民族卽ち山岳住民の嚮導者となつて、歷史上重要なる地位を占めて居るのは、極めて興味あることで、また自然である。

太古埃及人は、シリヤ或はパレスチンの遊牧民の王、或は首長をヒクと呼んだ。例へば埃及人のヒクサチウ、或はヒク・サスは、其意味『異國王』といふことである。希臘人も之を採りてヒクソスと呼んで居る。(註)このヒク卽ち首長は、古事記のヒコと相通ずる樣に思はれる。ヒコ卽ち彦は、又日子と書かれる。日の子といふ意味であるかも知れない。『天子』の語と同樣の意味をなして、貴族或は首長といふことであらう。そして此解釋を猿田彦神に適用すると、猿田彦神とは卽ちカルダ人の首長といふことになる。當時カルダ民族社會には多數の大小名があつたであらう。そして吾天孫民族を案内したものは卽ち其内の一大名或は其人民であつたことが想像される。

(註) Maspelo "Histoire ancienne des peuples de l'orient" 一九八頁

玆に些か疑問となるのは、猿田彦神が天孫民族を導いて通過した其道筋が果してオロントやジョルダンの流域であつたか、是れである。是れは地理的研究の部に於て詳論せるが故に、玆には唯だ一語を記するに止む。卽ち其道筋はアマヌス山の西方、イスス灣から地中海の沿岸を辿つてパレスチン南方地上に上陸したの

では無いか、といふ一事を記して置く。さうすると、猿田彦神の故郷として指定さるゝ伊勢とは卽ち『イスス』の地を指すのでは無いか。其イススの西北山岳地方をクマヌと稱したる（太古）も面白い。學者の說によれば、彼の西歐諸地方や東洋諸地方に亘りて大航路を開き、世界貿易の中心となれるフェニシヤ人は、卽ち此カルデヤ人の移住し來れる者らしいが、果して然らば、猿田彦神も亦このフェニシヤ人の祖先であつたかも知れない。此世界的交通の開拓者が天孫民族の道案內をしたのは、極めて自然である。

九、建御雷之神、思兼神

吾が天孫民族が果してヘブロン山の麓やシナイ半島に住居したとすれば、建御電之神は、或はヘブリユウ人のエホバ神、卽ちヤアベエ神を語り傳へたものでは無いかと疑はれる。ヤアベエ神卽ちエホバは、其最初はシナイ地方人の守護神にして、其本性は卽ち雷電であつたといふ。此山岳地方に棲息したる雷電の神エホバは、ヘブリユウ民族の爲に崇められて、遂に其世界的宗教の主神となつた。天孫民族が此地方を通過するに當りて之を天照大御神の補神となしたるは、蓋し餘り不自然のことでは無い。

私は亦、思兼神（オモカネノカミ）は舊約聖書にあるモオゼでは無いかと思ふ。併し之は證據を擧げて論ずべく、私は未だ材料を有しない。唯だ其性格や職分が極めて類似せる故に之を連想するといふに過ぎない。ヘブリユウの記事ではモオゼが頗る文明開化せる人間で、且つ頗る政治家的態度を有するに對して、古事記の思兼神は、極めて單純な記事しか有しない。併し其記事は極て單純なるに係はらず、兩者の性格、職分が頗る類似せることは爭はれない。神の託宣を人民に傳へて之に其方途を示すことを以て使命としたる思兼神は、イスラエル人の指導者たりしモオゼと異名同人では無いかと思はれる。且つ、モオゼといふ人物や、その五大書は、本來ユダヤ民族中に實存したものでは無くて、カルデヤ或はエジプト邊りから借り來たつた傳說ではないかと學者は言ふ。エリゼ・ルクリユは曰く『其ドグマと儀式とを有する信仰は、彼の太古のアラメヤ及びバビロニヤの傳說と時代を同じうし、是等の傳說を集めたものが卽ち『五書』を成したのである。ジョシヤ王以前に於ては、此最古の書と稱せらるゝ『五書』に就て、諸王及び豫言者中に一人も之に言及したものが無い。ダビデの詩篇にも、ソロモンの傳道書にも、一語之に言及して居ない。モオゼの名すら曾て一語も談られて居ない。此大立法家は當時の世に些かも認められず、其存在も疑はれる程である。更に此の如き猶太傳說其ものも、彼の埃及及びカルデヤの傳說が輸入せらるゝ以前に於て果して存在せしや、否や、頗る疑はしいのである。』（註）果して然らば、古事記の思兼神は、或はカルデヤの傳說を直接に繼承したのかも知れない。

（註）『地人論』第二卷一〇二頁

以上、建御雷之神が、シナイ地方土着のエホバ神であつたこと、思兼神がカルデヤ或は埃及の傳說から出たモオゼであること、等が朧げながらも合點し得る時は、是れまた、吾天孫民族が此地方に住し或は通過したるヒツチト人種たることを論證するの一資料となるであらう。但し、私は尙ほ、此建御雷之神及び思兼神に就いて、細密な研究を試みたいと思ふが、其れは後日を待たねばならぬ。

以上數箇條の說明によりて、讀者は略ぼ、天孫民族とヒツチト民族との關係を了解したであらう。そして天孫民族が葦原の中國に行かずして、筑紫の國に赴いた道筋も能く了解し得るであらう。（註）

（註）紅海兩沿岸一體の地を筑紫と稱する理由に就いては地理的研究の章に詳說する

勿論、古事記神話の記する處は多くの他の地方の傳說神話を混入せるが故に、歷史的事實としては隨分難解の點も多いが、併し地理學的研究の補助によりて些か新たなる光明を此間に認め得るのである。

第十四章　出雲民族

一、天神と國神

須佐之男命の系統を引いた大國主神一族の歷史は、古事記神話中に最も重大な部分を成して居る。抑も此大國主神一族、卽ち出雲民族と天忍穗耳命の後裔、卽ち天孫民族とは如何なる關係を有するか。神話には天照大御神と須佐之男命とは同胞（きやうだい）として記してある。卽ち伊邪那岐命が、

『左の御目を洗ひ給ひし時に、成りませる神の御名は天照大御神

『次に右の御目を洗ひ給ひし時に、成りませる神の御名は月讀命

『次に御鼻を洗ひ給ひし時に、成りませる神の御名は建速須佐之男命』

であると、古事記には記してある。果して然らば、天照大御神と須佐之男命との間に生れた天孫民族と、須

佐之男命が其後に他の女性との間に儲けた出雲民族とは、血統を同じうするものである。然し同族ではあるが、此出雲民族に對する古事記の態度は、天孫民族に對するとは頗る異なつて居る。即ち天孫民族を正統の治者とし、出雲民族は臣下として取扱つて居る。丁度、舊約聖書が、ノアの三人の子の内、カム及び其一族を疎外して居るのと同樣である。

學者の說によると、セミチツク人に先だつてメソポタミヤの地に移住して來た民族にアツカド人がある。然るに其アツカドと相隣してスメル人が住んで居た。然るに其『スメル』の語は、之を『平野の人』の意味に用ひられ、『アツカド』の語は之を『山嶽の人』の意味に使はれた。古事記が天つ神と國つ神とに分ちたるも同樣で、天つ神は『山岳の民族』で國つ神は『平野の民族』を代表する樣に解釋される。而して天つ神と國つ神も同じ言語を語つて居たらしく、此點も亦アツカド人とスメル人とが同言語を語つて居たのと同樣である。神武天皇が神ヤマトイワレ彦命と稱せられし其ヤマトは山人の意とも解せられ、大國主神が『水穗國主神』を意味し又其『平野の人』を意味することも亦彼のアツカド人とスメル人との對照に酷似する。然し此同一血族と見らるべき二派の民族が、かく對照される樣になつたのは、大國主神と忍穗耳命の時代になつてからのことである。天照大御神と須佐之男命との時代には元より其區別が無かつた。故に出雲民族の特別なる研究の主要目的ともなるものは大國主神である。

二、須佐之男命

古事記神話に於て、出雲民族の中堅となつて居る者は大國主命であること前述の如くである。併し此一族の系統ある研究を施すには、之を須佐之男命から始めねばならぬ。

古事記に表はれたる須佐之男命は、亂暴、狼藉、至らざる無き、極惡非道の無賴漢の樣ではあるが、又一面より見れば、極めて優しい多情多感の人物である樣にも見える。其『營田の阿はなち、溝埋め、亦其大嘗きこしめす殿に糞まり散し』或は『服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて墜入る』等の記事より見れば、須佐之男命の性質は甚だ酷薄無情である樣に思はれる。然るに出雲國に追放せられて足名椎一家の愁歎を聞くや、『八俣ヲロチ』を殺して其一家を安んじ、其家の女、櫛名田姫を妻に迎へ、之が爲に宮を建てゝ例の『八雲たつ』の歌を詠むあたりは、實に滅あつて猛からずと言ふ風である。

學者或は、須佐之男命と月讀命とは、もと同人物であると唱へて居る向もあるが其れはどうでも宜しい。又或は、須佐之男命は暴風を徵象したものだと唱へる人もある。其れもどうでも宜しい。須佐之男命の名に冠らせるに建速の語を以てしてあるが、其タケハヤは山風を意味する樣にも思はれる。そして此命は嵐の樣

な性質を有つて居たからかう名づけられたのだとも解釋される。其れもどうでも宜しい。唯だ須佐之男命は『海原をしらせ』と命ぜられたが、之を喜ばず、『僕は妣の國根の堅州國に罷らむと欲ふが故に泣く』と言ひ伊邪那岐命の忿に觸れて、追放せられた。次に彼の暴動事件の結果、今度は出雲國に追はれた。此記事に依ると、出雲は決して樂しい國では無かつたに相違無い。何となれば、罪人を送るに、愉快な樂園を選ばうとは思はれない。又、足名椎一家をなやました『高志(こし)の八俣遠呂知』を殺したとあるが故に、其出雲は決して寒國では無いであらう。蓋し寒國に大蛇は棲息せぬであらう。

三、刺國とシュス國

私は出雲民族は天孫民族と同じくアツカド人であると思ふ。(ヒツチト人はアツカド人と祖先を同じうすると私は思ふ)其アツカド人は、もと北方カスピヤン海に沿うて南漸し、ペルシヤの高原を過つて、ケルカ河畔のシュス(或はスサとも稱せられる)の都に出で、次いで下部カルデヤに達したのだと言ふ。そしてシュスは太古の世界に於いて頗る重要なる都會と成つて居た。須佐之男命の名は此シュス即ちスサの國名から由來したのではあるまいか。即ち須佐之男は、スサの男といふ意味ではあるまいか。須佐之男命の後裔にして大國主神の父たる刺國(サシクニ)大神の名も、或は此シュスより由來したものではあるまいか。『刺國』は即ちシュス國のことではあるまいか。

かく解釋すると、此シュスの國より出でたる大國主神がメソポタミヤ即ち葦原の中國を治め、シュス國を屏風の樣に圍んで居るザグロス山脈が越の國を形成するといふのも自然の推論となる。そして須佐之男命が追放せられたる出雲の國は此ザグロス山脈の南東方でペルシヤ海に沿うた一體の地を指し、更にアラビヤのオーマン崎附近一體をも其内に包容したるものと解釋することが出來る。『海原の國』がペルシヤ灣頭の低地からアラビヤ沿岸に亘つて存したとすれば、神話の記事と歴史とは一致する。但し是等の說明は之を地理的研究の部に讓る。

私は須佐之男命の『八雲立つ』の歌には種々なる意味が含まれて居ると思ふ。即ち、

やくもたつ、いづもやへがき、つまごみに、やへがきつくる、そのやへがきを

の歌には、愛妻を思ふ深い戀情が表されて居ると同時に、雲を愛し、崇拜するの情が歌はれて居ると思ふ。『八雲たつ』の起句其ものが、既に雲に對する讃美の語である。何故に須佐之男命は此程までに雲を愛し望んだのであらう。こゝに亦意義がある。私は須佐之男命が流されたる出雲の國は旱魃の國であると思ふ。そして命は雨を想ひ雲を讃美する樣になつたのであらう。抑もアラビヤの印度沿岸一體の地殊に今のバブエ

ル・マンデブの邊りは、古來之を『幸のアラビヤ』と呼ぶが、其れは、彼の旱魃の國にありて獨り此沿岸地方のみは、印度洋のムウソンが送る雲霧によつて毎朝晝まで能く地面を濕ほさるゝが故である。旱魃に雲霓を望むが如しとは是れを言ふのである。されば須佐之男命の戀歌は、亦同時に雲霧讃美の歌であることを注意すべきであると同時に、其出雲が旱魃の地であることを想察せねばならぬ。さすれば、此命が母の國、根の堅洲國（卽ちカスピヤン海の東岸）を追慕するに係はらず、此出雲に流されたる理由も分り、亦此命の苦痛も想察することが出來る。

四、大國主神

大國主神は出雲民族中の大立物である。古事記の大國主神に關する記事は、他の何れの神に關するよりも多い。大國主神は古事記神話中で最も傑出したる人物である。第一に其一家族中にても選ばれたる一人者であつた。次に治國平天下の道に務め勵みたることは彼の少名彦名神の一條に能く顯れて居る。第三に此神が國民の人望を一身に荷うて居たことは、天つ神より、二三回の强硬談判を受けながら其人民が却つて大國主神に服した事實によりて分る。

私は此大國主神の人格が、ヘブリユウの傳說にあるアブラハムに酷似することを思ふ。其平和的な、其敬神的な、其從順な、古事記神話中の唯一の道德的な、そして經政家的の性質は、舊約聖書のアブラハムに酷似して居る。アブラハムはカルデヤのウルの都から、神の導きによりてハランの都に至り、其れからエヂプトまでも旅し、更にパレスチンに歸つてヘブロン山の麓で死んだことになつて居る。大國主神も亦旅をして居る。併し旅行の方角は大分アブラハムのとは異つて居る。此神は出雲より根の堅洲國に祖先須佐之男命を訪ひて其女須勢理姬を娶り、高志之國に旅して沼河姬と婚して居る。

五、大國主神とアブラハム

大國主神とアブラハムとの生涯に尙ほ他に似寄つた一事がある。其れは其正妻と副妾との一條である。大國主神は須佐之男命の女須勢理姬を娶りて之を嫡妻とした。然るに此神は是より以前から八上姬といふ婦人に戀されて居た。そして互に相許すの仲となつた。軈て二人の間に子までなした。併し優しい大國主神は深く其嫡妻須勢理姬を憚かつた。古事記は記して曰く、

『其嫡妻須勢理毘賣（ヒメ）を畏みて、其生ませる子をば、木の俣（マタ）に刺挾みて返りましき。

故、其御子の名を木の俣の神と申す。亦の名は御井の神とも謂す。』

何故に御井の神と名くるに至りしか、其理由が分らない。處がアブラハムに關する舊約聖書の記事によると恰も右古事記の註釋ででもある樣な件りがある。卽ち、創世記第二十一章の九節以下を左に摘錄して見よう。

『時にサラ（アブラハムの正妻）はハガルがアブラハムに生みたる子をエジプト人の笑ふを見て、アブラハムに言ひけるは、此婢（しもめ）と其子を逐ひ出せ、此婢の子は吾子イサクと共に嗣子となるべからざるなりと。アブラハム其子のために甚く此事を憂へたり。……アブラハム朝夙に起きて、パンと水の革囊とを取り、ハガルに與へて之を其肩に負せ、其子を携へて去らしめければ、彼往きてベエルシバ（盟約（チカヒ）の井）の曠野にさまよひしが、革囊の水遂につきたれば、子を木の下に置き、我子の死ぬるを見るに忍びずと言ひて遙かに行き……神ハガルの目を開きたまひければ水の井あるを知り、行きて革囊に水を充し童兒に飲ましめたり、神童兒と偕に在す。云々』

古事記の記事が極めて斷片的なるに反して、創世記の記事は頗る合理的である。前者が極めて原始的なるに後者は頗る近代的である。古事記の記事が甚だ粗朴無邪氣なるに對して創世記の記事は甚だ理窟つぽい。唯だ兩者が頗る似寄つて居るのが面白い。大國主神の子は木の俣に挾み置かれ、アブラハムの子は木の下に遺された。大國主神の子は唯だ御井の神と言はれたが、アブラハムの子は盟の井によりて救はれ、神偕に在ますと傳へられて居る。（註）

（註）誓の井に關しては他に由緒あれども玆には略す。

六、大國主神とオルカム祖神

大國主神がアブラハムであるといふ事を信ずるには、以上の事實のみにてはまだ不充分である。而して學者の說によると此アブラハムの歷史は、カルデヤのオルクハム（或はオルカム）の傳說を混入して居る事が甚だ多いとのことである。人民の父オルクハムは社會の改革者としてバビロニヤ社會全體に語り傳へられた人である。アブラハム（民衆の父）が此オルクハムに更に多くのヘブリユウ的屬性を加味して創世記中に描かれたものであることは諸學者の認むる處である。されば大國主神の人物性格がアブラハムの其れに似て居るのは、大國主神がオルクハム其人であるからだと私は思ふ。アブラハムと大國主神の二者の生涯に些かの類似點と多くの相異點とを存するのは、アブラハムがヘブリユウ人によりて新たに多大の修飾を加へられたと同時に、大國主神が日本人によりて新たに之に特別の事實を附加せられた爲であると思ふ。またヘブリユウ人はアブラハムを以て我が民族の正當の祖先と見做したが、大和民族は大國主神を以て國神となし、天神の

臣下として取扱つて居る。

古事記の記者が大國主神を傍系の國神として取扱つて居るに係はらず、其記事の中に隱約の間に表はされて居る性格は、頗る高邁、優雅で、古事記中最も出色の人物である。

私は此大國主神の本地的人物はカルデヤのオルクハムと信ずること前述の如くであるが、不幸にして目下其オルクハムの閲歷を詳知することが出來ない。或は大國主神は却つてオルクハムの傳說の起原的人物であるかも知れない、とも思はれる。蓋し、今より六七千年前にカルデヤに遺された記錄中に、『ケンジ』或は『ケニ』の文字あり、其意味は『溝と葦との國』であり、丁度古事記の『豐葦原之水穗國』に相當し、其『ケニ』は更に『クニ』と變じ、大クニ主といふ意味となり、同時にケンジの主といふ意味になる。そして『ケンジ』若くは『ケニ』は太古の時代にカルデヤ其のものゝ名であつた。故に大國主とはカルデヤの主といふ意味である。故に大國主はオルクハムよりも却て原始的人物であつたかも知れない。

『ケニ』の音が『クニ』と變ずるは極めて普通のことである。即ちEの字は英語では通常ェと發音されるが佛語では通常ウと發音される。例へば瓜（Melon）を英語流に發音すればメロンであるが、佛語ではムロンである。Second を英語ではセコンドと發音するが佛語ではスゴンである。故に『ケニ』が『クニ』と變ずるのは極めて自然である。太古のカルデヤは『ケンジ』と呼ばれ、『ケンジ』は更に優雅な發音法に依りて『ケニ』と變はり、『ケニ』は場合によりて『クニ』となる。されば大クニ主神がカルデヤの太古の主であつたと、或はあつたと想像されたことは其名によりて發明される。

パミール高原の近傍に『玉の道』や『絹の道』がある。是等は支那と西方諸國との貿易の道であつた。（ルクリュ）

第十五章　大弓（夷）民族

一、天照大御神の弓

私は第二章の『五、ヒッチトの遺物』中に、日本に古代から使用された大弓や劍は、ペルシヤや支那に傳へられたものとは異なり、殊に其鞆（弦の反射に備へる爲めの）は支那やペルシヤにては知られない武器であるがニニヴや、バビロンの浮彫像中に能く之を發見するといふ、ミュンステルベルグの説を引用して置いた。

日本の古事記神話の記する處によると、天照大御神からして此弓や鞆を身に着けられたとの事である。『ソビラには千人の靫を負ひ、五百人の靫を付け、亦伊都（イツ）の竹鞆取佩ばして、弓腹ふり立て云々』とは天照大御神が須佐之男命の叛逆に向はんとせられた時の光景を記したものである。此時の武器として、單に弓矢のみ

第二十六圖　大弓を示すヒッチト古像

を記された點は殊に興味が深いのである。希臘の傳說にはアマゾン女軍國の女子達は强弓を引く爲に皆其妨げとなる乳房を切つたといふ事がある。其アマゾンとは卽ち私が天孫民族であらうと思ふヒツチト民族の大廟クマヌ神社に奉仕した神女達であるといふ。ヒツチトの盛時に此クマヌ神社の本尊『マ』女神に奉仕したるアマゾン仕女は六千人から居つたとの事である。彼女等が大弓を持つてダンスしたといふことも亦有名な事實である。天照大御神の右の記事と參照して極めて興味深きものである。

二、弓の重大使命

古事記の神話中には尙ほ幾つも弓の記事が出て居る。先づ記すべきは大國主神が根之堅洲國の須佐之男命の許に往かれ、其女須勢理姫と結婚する時の一挿話である。『其妻須勢理姫を負ひて、其大神(須佐之男命)の生大刀、生弓矢、又其天沼琴を取持たして逃出でます時に云々』須佐之男命は眠を覺まして『黃泉比良坂まで追ひ至して、遙々に望さけて大穴牢遲神(大國主の別名)を呼いて曰り給はく、其汝が持たる生大刀、生弓矢を以て、汝が庶兄弟どもをば、坂の御尾に追ひ伏せ云々』と叫ばれた。そして大國主神は『其大刀弓を持つて、其八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾ごとに追ひ伏せ、河の瀨毎に追ひ撥ひて國作り始め給ひき』とある。其大刀弓は新國家創成の上に重大な意義を持つて居る。

次に出て來る弓矢の記事は、天津神の一族と國津神の一族との交渉に際してゞある。『高御ムスビノ神、天照大御神、亦諸の神等に問給はく、葦原の中國に遣せる天の菩比神、久しく復言奏さず、亦何れの神を使してば吉けむ。こゝに思がねの神答曰けらく、天津國玉の神の子、天若日子を遣はしてむと白しき。かれこゝに、天之麻迦古弓、天之波波矢を天若日子に賜ひて遣はしき』處が若日子は其國に降下して大國主の女下照姫と婚して了つて、歸つて來ない。そこで雉名鳴女を遣して之を責めしめた。若日子は天神の賜へる弓矢で其雉を射殺した。然るに其矢は雉の胸を通して更に飛んで天照大御神等の坐ます天の安の河原に達した。そこで高御むすびの神が其矢は前きに賜はつたものであることを認め、之を投げ返すと、寢てゐた若日子の胸に中り、若日子は死んだ。此記事に於ても其弓矢は極めて重大な使命と神祕力とを含められて居る。

三、東夷は大弓民族

以上に記する如く、古事記神話に於て、弓矢は天孫民族と極めて重大なる關係を以て居る。然るに支那には古來、東夷西戎南蠻北狄の語があり、其夷とは卽ち大弓の意であるといふ。支那人から見れば日本人も東

夷の一族であつたに相違ないが、其東夷は大弓を以て有名であり、恐れられて居たものであらう。此夷人は支那に於ては上古既に諸邊境に居たらしい。久米邦武氏曰く、『夷は字書に大弓の會意にて、大弓を彎くより名けたりとあれば、北種とは別なり。其地點を按ずるに、吳の南なる淮水の兩岸には淮夷の國をなせることは既に禹貢に見ゆ。其西北の低地には徐夷の國をなし、周の初めに徐の偃王起り、國勢大に張りて北部を震動せしめたり。周の宣王は、江水漢水より師を下して淮夷徐夷を伐てこれを服從し、因て中興の譽れを得たり。春秋の時にも徐は猶强國なりしが、後に楚に併せられ、秦の始皇が一統の時に至り、淮泗の夷は散じて民戸になれり。是れみな南種の別族なるべし。山東の半島は萊夷の國なり、是も禹貢に見ゆ。萊夷は牧畜をなす村落の民族なれば、南種北種の混和なるか。』(註)

(註)　久米氏著『大日本時代史』古代上二二頁

四、カルデヤの弓

然るに大弓はバビロン文明の先驅たるスメル人の武力に重大なる影響を與へた。大弓は元來セミチツク人の使用した武器であつて六七千年以前のスメル人は未だ弓を知らなかつたのである。其事に就き碩學キング氏は記して曰く、『其領土を獲得した上に、ヅンギ(或はダンジ、今より四千三百年前)は又其最も有力なる武器の一をセム人から受け容れた。何となれば、其治世の第二十八年は、ウルの子等を弓術士として軍籍に入れた年として知られて居る。其以前のスメル人の主要な武器は槍であつた。そして彼等は密集したる戰隊を以て攻擊を加へ、其槍士の戰線は重い楯を以て防護されるのであつた。攻擊上の他の武器としては戰斧が使用された。而して更に第二義のものとしては投槍が用ゐられた　是れは既に大攻擊が行はれた後逃亡者の追擊に適したものであらう。……弓はセム人から輸入されたものらしい。そして彼等が戰爭に勝つたのは主として此を使用した爲であらう。卽ち彼等がスメル人の密集隊を其接戰前に打ち破りて意氣を阻喪せしめ得たのは實に此大弓であつたらう。ヅンギは其武器の利益を認めたに相違ない。此武器は、殊に山國に於て戰鬪が行はれる時、重い槍や楯が餘り役に立たない。そして密集隊を維持することが困難な場合に於て、其威力を發揮するであらう。彼の征戰の引續いての成功には、其射士隊が偉大なる援助となつたことは之を察することが出來る』(註)

(註)　King "Sumer and Akkad" 二八六頁—二八七頁

五、弓の移送者は何民族か

以上列叙した如く、古事記神話に於て弓が頗る重大な意義を有すること、此武器がバビロンからペルシヤや支那本國に傳はらないで却て日本や希臘に傳はつたこと支那の邊境所謂『夷民族』が大弓を彎く民族にして南方から移住したものなること、ヒツチトの婦人アマゾンが此强弓を以て有名であること、而して此大弓が重要な武器として既に太古のスメル民族に依つて採用され、そして其れが元來セミチツク人から學んだものであること等を綜合して見ると、古事記神話の弓は既に其太古に於てバビロン地方に行はれ、それが或は傳說として傳へられ又實際の武器として持ち來されたものであらう、と想像される。唯だ之を東方亞細亞に齎らしたものが何人種であつたか、夫れは極めて困難な問題である。セミチツク民族がユウフラテスの上流から降下してバビロン帝國を建設した時、スメル民族は驅逐されて東方へ東方へと移轉したから、此武器を東方に傳へたものは或は此スメル人であつたかも知れない。ヒツチト民族が天孫民族であるとしても、其東方降下は更らに後時の事であらねばならぬ。或はスメル人とは別に、セミチツク人と早くから交際して居たマレイ民族が此武器を持つて來たものであるかも知れない。最古に於て、印度洋から太平洋を股にかけて大いた世界を横行した民族は卽ち此マレイ民族であつたと言ふから、或は此民族であつたかも知れない。其之を日本に傳へた民族が何れであるにもせよ、其れが北方から來た民族で無くて、南方から來た民族である事は久米博士の記する處によつても想像することが出來よう。

第十六章　バク（貊）民族の東遷

一、天つ神と國つ神

私は前に、『文明の移住』の章に於て、西方カルデヤに精花を開きたる文明が、海陸兩面を傳ふて遙かに日本にまで到達したことを述べた。その或は海上を航し或は海邊を傳ふて、道中幾世紀を費やして、漸やく日本の南端の一地點に上陸したるものは、卽ち天孫民族であつた。之に對して陸上廣大なる山野を跋涉し、峻嶺を越え谿谷を横斷して、或は支那黄河の邊りに我が文明を手植ゑにし、更にシベリヤ、蒙古、滿洲を經て朝鮮を開き、また日本西海岸に上陸したものは卽ち出雲民族、バクトリヤ人であつた。コス卽ち越人も、伯人も、蓋しバク民族の同類であつたであらう。彼のザグロス山中に住するコセ人は通常バクチアリと稱せらるゝが、其バクチアリの名は卽ちバク民族たるの證據なのである。私は本章に於て、このバク民族が如何に

して支那、朝鮮、日本にまで移住して來たか、其道筋等に就て聊か西洋學者の所說を紹介したいと思ふ。

二、交通の跡

地球の東半球の東西兩洋の兩民族は五千年間互に他の生活に就て無知であつた。マルコ・ポロが支那の事情を西歐に傳へて以來も、此舊世界の太西、太平、兩洋に傾斜する兩地方間には、曾て直接の關係が無かつたものと想像された。而して此兩民族、卽ち白色人と黄色人とは、各自其大陸に獨立して發達したるものと想像された。其民族最初の起源に關する學說はどうあらうとも、此住處を異にする兩人種は、互に完全、獨立の發達を爲せしこと爭ふべからず、と主張せられた。然るに、現代科學の審査によりて、此東西兩地面の間に明白なる交通路の存立することが知れた。而して其諸通路には、諸國民往來の跡を明白に存し、又、往時の年代記が些かも記載せざるに關らず、非常に繁激なる交通のありし跡さへ明かにされた。且つや、各民族の傳說や、史料や、風俗や、習慣や、智識や、產業方法や、に就いて更に一層深く研究する時は、曾て隔離閉鎖されて居たと思はれるたる諸國民間に、直接の交通と相互教育との行はれたことが明知せられるのである。

三、中亞の地勢

第一に其地勢が、東半球の西傾斜面と東傾斜面（パミール、天山等の諸高地を中央にして東西兩面に傾斜せる東亞と西亞及び歐洲を示す）との交通の容易なりしことを示す。此點に於ては、支那は印度に於けるよりも遙かに便利の地位に在る。蓋し印度は其西北方の陸地殆ど閉鎖せられ、唯だ海によりてのみ國外に出ることが出來る。從て往時その西方亞細亞及び羅歐巴との交通は、單にバクトリヤ人の仲介によりて行はれたもので、直接には行はれなかつた。彼のイラニイの砂漠は、旅行者をして北方迂回を餘儀無くせしめ、又彼の中央大山脈を二回通過することを餘儀無くせしむる。卽ち東は、カブールよりバミヤン峽路に至るアフガン路、西は、メルヴの窪地及び其他のチュルクメン諸峽路によらねばならぬのである。之に反して、カスピヤン及びアラル海邊から支那に達する自然の通路は多數に存在する。其内パミール高原を通過する諸山路は極めて困難ではあるが、併し通行し得べきものである。又、天山の南北兩路を辿る諸通路は唯だ其行程の長いといふ困難あるのみで、他に難事は無い。此北方高原地方に於ては、其通路は各國民に對して廣く大いに開かれて居る。

白雪地を蔽ひ、沼湖到處に散在するパミールの高原は、多くの民衆の爲には、難過の關門であつたに相違無い。夏期にあつても、自然は極めて峻嚴、風は餘りに酷烈であつたに相違ない。殊に平野の住民に對してさうであつたであらう。然も勇敢なる旅人は此難處にも通路を求めて往來した。遊牧民は一年中の好期節、數ケ月間を選んで、家畜隊を引率しながら此高原を通過した。そして此高原の四方に、田舍村落や都市を發見して此處に宿泊することも出來た。且つ其交通が行はれたといふ有力な證據は、パミール高原の東西兩方面の住民が起原を同じうすといふこと是れである。彼等は數世紀に亘りて相離れ、互に差異を生じたでもあらうが、併し彼等は同風俗と同國語を以て、同樣の進化文明を致したのである。歷史の起原時に當りて其高原の東西兩方面の谿谷及び其平野に定住したものは、アリヤン人、印度歐羅巴人であつた。然るに今日に於ては、此地方の住民は主として土耳古的蒙古人種である。又、之と同時に露西亞土耳其坦（キバ、ボカラ、フェルガナ等）及び支那土耳其坦（カシユガリ、及びタリム低地）も亦トルコ、モンゴル人種の住處となつた。唯だ併しながら、此高原の兩斜面には、尙ほ若干のアリヤン人種の部落及び混合せる『タルタル』人の集團を存するのである。されば此高原の分水嶺は諸方の民族に對して決して不可越の障碍では無かつた。

四、土地の變遷

住民等の證言により、歴史の記錄により、又、既に乾涸せる水流の痕跡によりて、此中央亞細亞に於て土地の大乾燥が行はれたことが明白となつた。而して此現象は數千年間に亘れる氣候變化の事實を生じ、又地球其ものゝ乾燥作用と相應ずるものである。併し此論定は地理學的研究上最も複雜なる問題であることを忘れてはならぬ。唯だ久しき往古の時代には、其地方に於ける旅人の往復が今日よりも遙かに頻繁であつたことは之を斷言することが出來る。例へばタリムの流域の如きは、今日も尙ほ通行の場所として頗る重要の地ではあるが、往古に於ては、此亞細亞の脊髓たる大山脈の兩斜面間に於ける商業貿易に對して、今日よりも非常に多くの資料を供給したのである。

スヴエン・ヘディン其他の近代探檢家は、今日では人の生活資料を發見し難き砂漠の中に、幾つもの都市の跡を發見した。水流の移轉や變化が住民の移住を促し、都市の遺棄を餘儀なくせしめた事は明白である。此砂漠中に最初に發見せられし廢都は、駱駝馭者等によりてタクラマカンと名けらるゝもの是であるが、其住民は少くとも數千人あつたらうと稱せられる。其發見せられし物品、卽ち木材や、彫像や、繪畫等により

て之を見るに、此『亞細亞のポンペイ』(註)は少くとも一千年以前、卽ち多分、彼の第八世紀の回教徒侵入以前のもので、佛教徒の住居せる處であつたらしい。其繪畫や彫像に現はされたる人相によると、其中にはアリヤン型もあれば、ペルシヤ型もあり、黃色人型もあれば、ヒンドウ型もある。

(註) ポンペイは伊國ヴエスビヤス山麓に在り、今より千八百五十年前同山の噴火によりて全部堙沒せられしが、十八世紀に至り一農夫の彫像發見に端緒を得て漸くその一部を發掘せられしもの。

五、玉の道、絹の道

カシガリー大谿谷の北方、クルジヤの諸關門は、國の內外に往復する旅民に對して大通路となること容易である。是よりも南方にある諸峽路、卽ちパミール高原や天山南路を通ずる『玉の道』や『絹の道』は、單に宣教師や巡禮者や商人によりて僅かに利用せられたに過ぎない。卽ち商業と文明の通路に過ぎなかつた。然るに彼のクルジヤの道路及び天山以北の通路は、移民及び侵入の道路となつた。パミール及び天山より亞細亞東北端に達する連山は、種々なる名稱、種々なる山脈を形成するが、此大連山の諸處に存する切れ途は何れも廣大なる通門を開いて居るのである。支那歴史上に於て、多くの移住民、侵入軍が此方面より來れる

第二十七圖—近代の遊牧バクチアリ即ちバク（貊）氏族の典型

は亦自然である。

以上の考察によりて、中央亞細亞より支那の西北部に通ずる交通口の概略を知ることが出來たであらう。支那の文明を開拓せる太古の移住民等は蓋し此地方を通過して漸く黃河の流域に居を定むるに至つたのであらう。開化せる支那人は、我が往昔の祖國を方示するに、決して山岳地方を以てせずして、却て甘肅省及び『石門』の方向を以てする。支那征服者が進み來れる道筋は實に此に在つた。テリヤン・ド・ラ・クツブリーの讃美すべき學識と徹底と論證とを以て示せし處、亦右の如くである。

六、バク民族の移住

『かく、支那を征服統治せる移住者は、其年代記中に一般にバク・シン（多分百姓の意であらう）といふ名稱で書いてある。バク・シンは通常之を百家族の意に翻譯される。……併しテリヤン・ド・ラ・クツブリイに由れば、此バク（百）の名は實際一の固有名詞に相違なく、通俗の解釋（即ち百姓——或は百家族となす解釋）の如きは、之に重きを置くことは出來ない。バク・シン（百姓）即ち『バク人家族』は、即ち曾てカルデヤのユウフラテス河下流に生活したるバク民族の代表者であつたに相違ない。彼等は其生活の記念を諸

方に遺し、多くの都市、多くの場所に其名稱を傳へた。例へばバク・トル（Bac-tres）バク・トリアン（Bac-triane）バク・チヤリ（Bak-tyari）バク・イスタン（Bag-istun）の如き、更に有名なるバク・ダツド（Bag-dad）の如き其最も著しきものである。若し此假定にして正確なりとせば、彼のカルデヤの年代記に語らるゝ『黑頭の人』或は『サグ・ジカ』は、卽ち此バクと同一のものであらう。そして是は支那に於て亦大多數のタイプとして記錄せらるゝ處である』（註）

（註）エリゼ・ルクリュ著『地人論』第三卷五四頁參照

『此假定に從ふ時は、ポタミヤ平野のバク民族は、先づシュスの地方に移住し、久しきの間同地方にありてナクホント（Nakhont）の稱號を有する强王の下に生活したらしい。そして彼等は漸やく東方に向つて其進路を採つた。其國はバクトリヤと稱せられた。其より小團體を成してパミールの高原を越えてカシュガリイに下り、漸次に支那本土の門戸たる甘肅地方に到達した。此時代に於ける同地の氣候や水分を多存せる自然は、其移住を容易ならしめた。若し夫れ此移住を成就したる首長卽ち『ナクホント』の名稱は、是れ支那に於けるナイクンテ（Nai-Khun-te）卽ちナイ・ホアン・チ（Nai-Hoang-ti）（黃帝）是れである。彼の Shen-nung（神農か）に關する傳說は能く彼のシヤルジナ卽ちサルゴンの名稱あるポタミヤ貴族を連想せしめる。』（註）

（註）前同書五五頁

以上はエリゼ・ルクリュが倫敦ブリチシ・ミューゼアムの學者テリヤン・クップリイの意見を略叙したものである。テリヤン・クップリイの說は必ずしも悉く正確とは言へぬが、然し爭ふべからざる多くの眞實を有する事はルクリュも承認して居る。曰く、『ユウフラテス沿岸より來れる多數の移民團體が黃河の流域に到り、彼等の文明を齎らして同地方の國民精神を征服するに至つたことは、何人と雖ども之を否定し得ぬ處である。

七、貊はバクトリヤンなり

バク民族は斯くの如くに支那の黃河流域にカルデヤ文明を移植した。支那天文學がカルデヤの其れに髣髴たるは亦當然である。バク民族は黃河に開拓運動を起せしと同時に、蒙古、滿洲を經て朝鮮にまで前進して來た。支那上古の記錄に貊、或は貉、或は狛、等と記するは、卽ち皆此バク民族のことであると思ふ。而して此バク民族こそ、是れ實に須佐之男命や大國主神の後裔、換言すればペルシヤ灣頭の出雲民族であつて、其れが朝鮮より更に我國の山陰道に移住して日本に於ける出雲民族の基礎を樹てたのではあるまいか。

予は本書を執筆中、福田芳之助といふ人の『神代の研究』を一友人より貸與せられて之を飛讀みした。然

るに其中に右の貊に關する記事がある。福田氏の研究方針は予の其れと全然異つては居るが、左に引用する數節は予の所論に對する興味ある引證となれば、之を拜借することにした。

『貊一に貉、或は貘、或は狛に作る。北方の一大古種族にして、周禮に、職方氏四夷九貉を掌ることを記し、詩の大雅に、王錫二韓侯一。其追其貊。奄二受北國一。因以其伯とも見えたり。而れども此種族の秦漢以前に於ける行動は、唯だ經傳に其名を存するのみにて甚だ詳かならず、漢代に至り、其跡漸やく著はれ、今の滿洲一帶に在るものを夫餘といひ、長白山東より黑龍江地方に在るものを沃沮といひ、半島の東北面に在るものを濊貊といひ、最後に鴨綠江畔に起るものを高勾驪といふ。皆貊種なり。』

『濊傳に其人慤愨嗜欲少く、廉恥あり、請勾せず、言語風俗大抵勾驪に同じ、衣服異なるあり、男女皆曲領を著す、男子銀花を繫ぐ、廣數寸、以て飾と爲す。其俗山川を重んず。山川各部界あり。妄に相涉入するを得ず、同姓婚せず、忌諱多し、疾病死亡、輒ち舊宅を棄てゝ更に新居を作る。麻布蠶桑あり、綿布を作る、曉に星宿を候うて豫め歲の豐約を知る、珠玉を以て寶と爲さず、常に十月を以て天を祭る、晝夜飲酒歌舞、名づけて舞天といふ。其邑落相侵犯するものあれば、輒ち相罰し、生口牛馬を責む。之を責禍と名づく。人を殺すものは死を償ふ、寇盜少し、能く步義す、矛長さ三丈のものを作る。或は數人共に之を持つ。東沃沮傳に其葬大木槨を作る。長さ十餘丈、一頭を開きて戸を作す。新たに死するもの、皆假に之を埋め僅に形を覆はしむ。皮肉盡くれば、乃ち骨を取りて、槨中に置く、擧家皆共に一槨。高勾驪傳に、其俗潔淨自ら喜ぶ、暮夜男女群聚、相就いて歌戲す、鬼神社稷零星を祠るを好み、十月を以て天を祭り大會す、名づけて東盟といふ。其國大穴あり、隧神と號す。亦十月を以て迎へて之を祭る。其公會衣服、皆錦繡金銀以て自ら飾る、蹲踞を好み、俎机を用ふ、風俗淫を尙ぶ、父子川を同うして浴し、室を共にして寢ぬ。夫餘傳に、其人麤大彊勇にして謹厚寇鈔を爲さず、臘月を以て天を祭り、大會連日、飲食歌舞す。名づけて迎鼓といふ、此時刑獄を斷じ囚徒を解く、軍事あれば亦天を祭る。牛を殺し蹄を以て吉凶を占ふ。死すれば則ち槨あり、棺なし、人を殺し葬に殉ず、多きは百を以て數ふと。是等は遙かに後の俗なれども亦以て古貊の一班を窺ふを得べし』

槨葬、殉死の習慣の如き、蓋しカルデヤ往古の傳說を繼げるものであらう。私が大國主神の別名なりと信ずるカルデヤの『オルカム祖神』は、殉死（或は犧牲）廢止を行へる改革者として著名な人物である。然るに遙かに東方に移住し來れる此民族が尙ほ此習俗を維持するは如何なる譯か。或は未だ其廢止せられざる以前に東方に出發せしか、或は移住の途次、又再び其習慣を生じたるか、此殉死の習俗は日本にも傳來したる跡あれば、隨分廣く行はれたものであらう。

八、コマの語原

高勾驪も貊民族の一種であること前に見る如くであるが、此高勾驪或は高麗を日本人がコマと發音するは何故であるか。福田氏『神代之研究』中に曰く、『クマは熊の朝鮮語コムと同語にして、釋紀祕訓には久麻那利を「コムナリ」ともせり。又邦語、狛を「コマ」と訓す。曾て百濟の都なりし公州を固麻(コマ)城と云ひしが、後に之を漢譯して熊州或は熊川と稱しぬ。之に由れば狛亦熊にして「コム」「コマ」「クマ」皆一音の轉なるを知べし。熊は夫餘の神獸なれば之を以て種族の稱呼と爲すこと猶夫餘に六畜を以て官に名づけ、馬加牛加狗加など云ふの類にして怪むに足らず。加は干の義なり。』

福田氏の所謂『神獸』とは卽ちトーテムのことであらう。多くの民族が禽獸其他の自然物を以て我が民族の徽章、氏神となし、其名を以て民族の名稱となし、之を尊敬し禮拜したるの例が甚だ少くない。其事は『ワニの傳說』の章に詳說してある。右バク民族に貘或は狛の字を適用したのは其發音法に由るのであらうが、卽ちバクといふ發音から此等の文字が採用せらるゝに至つたのであらう。或は貘や狛の文字が熊を意味する樣になつたのは、熊をトーテムとするバク民族に此等の文字を適用した爲であつたかも知れない。併し之は支那語學の精密なる調査を遂げた後で無くては斷言し得ぬことである。兎も角も以上の說明によりて、バク民族たる高麗をコマと稱ぶ所以は、其トーテムの名に由るものなることを讀者は了解したであらう。

九、熊野大神

更に福田氏『神代之研究』中に曰く、『出雲風土記』に須佐之男命を伊弉奈枳乃麻奈子に坐ます熊野武呂命と云ひ、出雲國造神賀詞にも、伊射奈伎乃日眞名子加夫呂岐熊野大神櫛御毛野命とありて、共に熊野の二字あり云々』『熊野大神は卽ち貊(コマ)主大神にして、此大神の貊地にまかりたまひける稜威を明かに御名の上に表はしたるものなり、云々』併し須佐之男命が日本に於て熊野大神と呼ばるゝに至つたのには尙ほ深い意味があらう。シュスの國より起つた此一族が須佐之男と稱し、其移住するに及びて熊をトーテムとなし、而して其守護神たる熊を採りて祖先の名稱となし、熊主大神と稱するに至れる經路には極めて複雜なる歷史が含まれて居る。

須佐之男命が、古事記神話中に種々なる性格と意味とを有することは、既に述べし處、更に後段にも述べんとする處である。神話學上須佐之男命は夜を意味し暴風を意味し冬を意味する。社會學上、命は一の革命

をシムボライズしたものである。母系組織から父系組織に變化する社會革命を徴象したものである。更に歴史學上に於て、此大神は、刺國の祖神である。刺國は卽ちシユス國である。波斯灣頭の重大都市（歴史上）を中心とせる地方である。須佐之男命は卽ち其住民の祖先である。其民族が中央亞細亞、蒙古、滿洲を經て朝鮮にまで到達して狛と稱せられ、又コマと稱せられた。其民族が祖先を祭るに須佐之男の大神とせずして熊野大神と稱する處に極めて面白い變遷がある。歴史的に活きた變遷の跡が見える。

暮雲收盡溢清寒。
銀漢無聲轉玉盤、
此生此夜不長好。
明月明年何處看。
（東　坡）

第十七章　鏡と劍と勾璁

一、安の河の劍と璁

古事記神話の中には劍と鏡と勾璁とに關する記事が頗る多い。先神よりイザナギノ命及びイザナミノ命に賜ひたる『天の沼矛』を初めとし、天の安の河に須佐之男命と天照大御神とウケビ給へる折りに大御神の乞ひ度せしといふ十拳（トツカ）劍、命の乞ひ度せしといふ八尺の勾璁、天の岩屋戸集會に當りてイシゴリドメノ命に科（オホ）せて作らしめた鏡、タマノオヤノ命に作らしめし八咫の勾璁、の如き、又、天照大御神がニニギノ命に賜ひし三種の神器、卽ち勾璁、鏡、及び草那藝の劍の如き、實に其著しきものである。

右の內、三種の神器に就ては畏こければ玆に研究せぬことにする。唯だ天の安の河にウケビ給ひし時、天照大御神と須佐之男命とが取り交はせしといふ劍と勾璁、及び岩屋戸集會に眞賢木に懸けたといふ鏡には、極めて深い意味があらうと思ふが故に、玆に些か諸國の神話と比較して其研究を試みる。天照大御神と須佐

之男命が安の河に相合ひ給ふた歴史は、弟命がイザナギノ命の命に從はずして遂に追放せられ、依て高天原に參上ぼり給ふ件から始まる。即ち姉の大御神は弟命に詰問して『何故に上り來ませる』と申された。弟命は之に答へて、『僕者邪心なし』と言はれた。そこで天照大御神は、『然らば汝の心の清明は何以て知ましと詔給ひき、こゝに須佐之男命各々宇氣比て子生なと答給ふ』

彼の十拳劍と八咫の勾璁の記事が出て來るのは是からである。左に天の安の河の一條に關する全文を抄錄する。

『かれこゝに天の安の河を中に置きて、ウケブ時に、天照大御神、先づ建速須佐之男命の佩せる十拳劍を乞度して、三段に打折りて、奴那登母母由良爾、天の眞名井に振り滌ぎて、サガミにカミて、吹き棄る、氣吹の狹霧に、成りませる神の名は多記理毘賣命、亦の名は奥津島比賣命……』

『建速須佐之男命、天照大御神の左の御ミヅラに纏せる八咫の勾璁の五百津の美須麻流の珠を乞ひ度して奴那登母母由良爾、天の眞名井に振り滌ぎて、佐賀美にカミて吹棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の名は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命……』

此記事に於て、十拳劍が男性を徵象し、八咫の勾璁が女性をシムボライズせる點は神話學研究材料として極めて尊き一事項である。また、天の岩屋戸集會に、八百萬の神が共に咲ひ給ふたので、天照大御神は怪しと思して岩屋戸を細目に開きて、何とてウズメは樂びし、亦八百萬の神は咲ふぞと詔り給ふた時、天のウズメの命は『汝命に益りて貴き神坐すが故にエラギ樂ぶと』言した。其貴き神とは即ち『鏡』であつた。私の考へでは、是も亦女性を徵象したものであると思ふ。鏡は女の魂として今日までも言ひ傳へられて居る。

二、性器崇拜

抑も人類の自然生活中、男女の性交生活ほど神祕なる强迫力を人間に對して有つて居るものは無い。而して之ほど人間の魂に深い印象を與へるものは無い。性交の機會が宗教的崇拜の對象となるのは即ち其結果で從て人情自然の發露といはねばならぬ。然るに後世に至り、佛教も基督教も此自然の大事實を强いて陰蔽し非難し、罪惡視する樣になつたのは、是れ畢竟人類の墮落を意味し、之を宗教家自ら告白したものである。之に就いては、老友故カアペンターの謹儼なる說明がある故、左に抄錄する。（註）

（註）カ氏著『異教及び基督教の信條』第十二章

『予は前數章に亘りて、基督教が、其主要教義に於て、異教儀式に結合し之を繼續したることを一再ならず說明した。然るに之に對して一の著大なる例外がある。勿論其れは基督教の性に對する態度、是れである。

異教の祭禮が一般に總ゆる種類の性的儀式を以て行はれ、之に多大の力を注がれたと同時に、是等の儀式を極めて露骨に厚かましき態度で性的本能に結び着けたことは亦著しい事實である。處が基督教々會は全體に於て、之と全然反對の方針を取つた。卽ち性を無視し、卑下し、且つ其完全なる本能までも之を厭惡した。予は敢て「基督教會」といふ。蓋しイエス自身（若し彼の傳說が歷史的眞實とすれば）が斯の如き極端なる獨斷的なる態度を採つたといふ證據が無いのである。而して初期の基督教教師等は（主要な例外としてポオロを除けば）左程に其偏僻を表はして居ないのである。實際、最初の三四世期間の基督教徒の集會には、尙ほ異教の習慣と信仰とが强大な勢力をなして居たことは衆知の事實である。……イエスの信徒等は、其婚禮の宴に性の神祕を讃美したる爲に罪せられしことさへ度々あつた（其の正不正は私の知つたことではない）。然るに、數世紀に亘りて教會が强力となり、其目標に向て發達した時——其修道僧等と彼等の斷根と禁慾主義と其獨身僧侶等と及び其讃美されたる徵象（例へば十字架、被淨式の三形象、リスの花形等）の性的意義の否定とを以て——漸く其非性慾的略形を立つるに至つた。而して前代の自然教に對立するに至つた。

三、性殖器崇拜と諸宗教

『基督教以前の諸宗教の性的儀式を論究するは、極めて大事業にして、予の玆に企て及ばざる處であるが、併し凡そ此問題に關する一般事實は殆ど明白の事である。吾等はバイブルに依りて、パレスチンのシリヤ人が生殖器崇拜の爲に嚴責せられたる事實を知る。同地の高き丘や靑樹の下には、必ず突起せる形象（男性）と Grove 或は Ashirah（女性）とが置いてあつた。（註）而して是と同樣の形象と之に關する儀式とは、猶太殿堂に入り來りて更に頗る普及せられ、彼のジョシヤ其他の改革者が之を根絕せんと努力したるにも係はらず、レホボアム王の後も尙ほ久しく盛んに行はれて居た。且つ此時代には、異教殿堂と同樣に猶太殿堂に定規的に來る少女等と男子等とがあつた。而して多くの場合に儀式の一部と見做されたる性交の勤務に任じた。婦人達は、或る「聖なる人」（例へば僧侶或は其儀式に參與する他の者）の種を宿すことを以て一種の名譽にして特權なりと說かれたものである。而して此の如き交合によりて生れたる小兒は、屢々「神の子」と稱せられた。——此稱呼が時に奇蹟的出產の傳說を誘起せしことは疑ふべからざることである。殿堂或は神苑の役女となれる少女等は其神殿內に於て拜男者たるべく豫想せられた。是れ恰もヘロドタスがバビロニヤのヴイナス、ミリタに就いて書ける處と頗る酷似する。卽ち同處にては土地の婦人は必ず一生に一度は此神殿に坐して或る異人に交接するものと見做された。かのシリヤ及び猶太の儀式は實にバビロニヤより起つたものである。……上に示したるバイブルの翻譯語 Grove は卽ちバビロニヤの天の女皇（イスタル）を意味

すと信ぜられるアシュラ（Ashirah）に外ならぬであらう』

（註）列王記第十七章二二―二四節、同書第二十三章。此節節は本章末尾に抄錄せり

『又印度に於けるヒンド教神殿及びその儀式には、是と全然同樣なる制度がある。即ち往時に於ける彼の舞妓の職務は慥かに性に關するものであつた。此少女の榮譽たるダンスは、現時に至りてすら、明白に色事的性質を帶びて居る。又、ヒンド教神殿の廊下などには非常に多くの「メンガム」（男性生殖器を表象せるもの）を存するが、總ゆる階級の婦人達、殊に母たらんことを希ふ婦人達は、頻繁に此に來りて、念入りに之に油を注ぎ、且つ極めて實際的方法を以て之に尊敬と奉仕の意を表する。……ソロモンが其殿堂に建てたる柱象は、Jachin（彼は堅つべし）及びBoaz（强力其内に在り）の名稱によりて右と同樣の徵象なること明白である。又此柱象に冠らすに柘榴（一般に女性の徵象とせらる）を以てするの事實は、益々此解釋を確むるものである。埃及の諸神殿の前に建てらるゝ方尖塔も亦之と同樣の意味を有するものである。有名なるT字形の十字架は、基督教よりも久しき以前、男性の表象として異教國に行はれて居た。之と同形象の上に楕圓球を加へたるものは即ち埃及の舊儀式に用ゐられるクリユゼス・アンサタ（Crux Ansata）『OT』であるが、之れは今日カイロ市に於て魔力の君として販賣される。そして其兩性合一の表象なることは隱約の間に說明されて居る。』

四、クリユゼス・アンサタと劍鏡

以上、私は舊友故エドワード・カアペンター氏の言を借りて、諸民族間に於ける兩性器崇拜の事實を說き其人情自然の發露なることを明かにした。彼の埃及のクリユゼス・アンサタ『OT』が劍と鏡とを組合せたる形象をなす如き、甚だ興味深き例證であると思ふ。學者の說によると、彼のアツカヂヤンのイシュタル徵象は西方に傳はりて或はアストレス或はアスタロス或はアシラと稱せられ、更にアルメニヤのアナイチス、フエニシヤのアスタルトとなつた。之れは天の愛の女神である。月神だと稱せらる。我が祖神、天照大御神の如きも或は此アツカド人のイシュタル即ち西方に傳はりてアスタロスと稱せられたる女神の名を傳へたものではあるまいか。私は最初、彼のカパドシヤの高原にヘト人と相隣して生活したと認めらるゝ太古希臘人のヘレス或はヒレス女神（即ち光明及び美の徵象）の名が即ち我天照大御神となつたのであらうと信じたが、人種的系統を深く研究して見るとアツカド人のイシュタルは吾祖神に極めて緣の近きものなることを發見するのである。併し私は此事に關して未だ精確なる論據を有せねば、之を力說することは出來ない。或は希臘神とバビロン神とが合して吾國の祖神となつたのかも知れない。

前段にエドワード・カアペンターが引用せる舊約聖書中の列王記の記事は、是れ猶太後代の王が兩性像崇拜を禁壓したる歴史を語るものであるが、併し其れと同時に、當時此兩性像崇拜の信仰と儀式とが頗る勢力を有し、ゼルサレムの殿堂までが此兩像を安置せることを證明するのである。讀者の便宜の爲に左に其主要なる數節を抄錄して參考に供する。

五、舊約列王紀の記事

『ユダ其父祖の爲したる諸の事に超えてエホバの目の前に惡を爲し、其犯したる罪に由りて、エホバの震怒を激せり。其は彼等も諸ての高山の上と、諸ての青木の下に、崇邱（男性象）と碑とアシラ像（女性）を建てたればなり』（註）

（註）列王記上、第十四章、二一―二三節

『アサは其父ダビデの如くエホバの目に適ふ事を爲し、男色を行ふ者を國より逐ひ出し其父祖等の造りたる諸の偶像を除けり、彼は亦其母マアカのアシラの像を造りしがために之を貶して太后たらしめざりき。而してアサ其像を毀ちてキデロンの谷に焚き棄てたり、但し崇邱は除かざりき。然れどアサの心は一生の間エホバに完全かりき。』（註）

（註）列王記上、十五章十一―十四節

『かくして王祭司の長ヒルキヤとその下にたつところの祭司等および門守等に命じてエホバの家よりしてバアルとアシラと天の衆群との爲に作りたる諸の器を執いださしめ、エルサレムの外にてキデロンの野にこれを燒き、その灰をベテルに持ゆかしめ、又ユダの王等が立てゝユダの邑々とエルサレムの四圍なる崇邱に香をたかしめたる祭司等を廢し、またバアルと日月星宿と天の衆群とに香を焚く者等をも廢せり。彼またエホバの家よりアシラ像をとりいだし、エルサレムの外に持ゆきてキデロン川にいたり、キデロン川においてこれを燒き、これを打碎きて粉となし、その粉を民の墓に散し、またヒホバの家の傍にある男娼の家を毀てり。其處はまた婦人がアシラのために天幕を織るところなりき。彼またユダの邑々より祭司をことごとく召よせまた祭司が香をたきたる崇邱をばゲバよりケベエルシバまでこれを汚し、また門にある崇邱を毀てり。是等の崇邱は一は邑の宰ヨシユアの門の入口にあり、一は邑の門にありて之に入る人の左にあたる。崇邱の祭司等はエルサレムにおいてエホバの壇にのぼれることをせざりき。但し彼等はその兄弟の中にありて無酵パンを食へり。王また人がその子息女に火の中を通らしめて之をモロクにささぐることなからんためにベンヒンノムの谷にあるトペテを汚し、またユダの王等が日のためにさゝげてエホバの家の門における馬をうつせり。

この馬はパルリムにある侍從ナタンメレクの室にをりしなり。彼また日の車を皆火に焚り、またユダの王等がアハズの樓の屋背につくりたる祭壇とマナセがエホバの家の兩の庭につくりたる祭壇とは王これを毀ち、これを其處より取くづして其碎片をキデロン川になげ捨たり。またイスラエルの王ソロマンが昔シドン人の憎むべき者なるアシタロテとモアブ人の憎むべき者なるケモシとアンモンの子孫の憎むべき者なるモロクのためにエルサレムの前において殲滅山（ほろぼしやま）の右に築きたる崇邱も王これを汚し、また諸の像をうち碎き、アシラ像をきりたふし、人の骨をもてその處々に充せり。またベテルにある壇、かのイスラエルに罪を犯させたる子バテの子ヤラベアムが造りし崇邱、すなはちその壇もその崇邱も彼これを毀ち、その崇邱を焚きてこれを粉にうち碎き、かつアシラ像を焚けり。』（註）

（註）列王記下、第二十三章四―一五節

第十八章　ワニの傳說

一、ワニは日本に棲息せず

古事記神話中に存するワニの傳說は、私の研究には可なり重要なる動機となつた。何となればワニは日本に棲息せぬ動物である。そして其れが私に他國の地理と歷史とを搜索するの動機を與へたのである。或は化石時代にワニが日本に生存したる形跡があるとて、古事記傳說の起原を此時代にまで遡らす學者もあるらしい。實は、ワニに關する疑問の抱懷者は私一人であると思つてゐたが、既に私よりも先輩のあることに氣が付いて頗る意を强うする。併しワニが化石時代に日本に生存したからとて其は餘りに年代が隔たり過ぎはすまいか？　私は古事記の中の傳說の出處に就いては他に着眼せねばなるまいと思ふ。

古事記神話中、ワニの傳說は二三箇所に出て居る。其內で重要な記事は、大國主神の記事中にある菟欺瞞

事件と、火遠理命卽ち日子穗々手見命を海津見より奉送したる事件と、此二者である。而して此二事件中、前者は出雲や稻羽の邊りで起つたことゝしてある。そして其出雲は私の考へでは波斯灣の入口の兩岸であるが此地方にはワニは生存しない。アツシリヤ人がシリヤの野を略して更に南進した時、埃及王は之にワニを送つたが、此動物はチグリス河口にては未知のものなりし爲め非常なセンセーションを起したといふ。また此事件が日本の出雲や稻羽に起つたとしても、信ぜられない話だ。然るに後者は紅海の邊りと思はるゝが故に其生存は之を想像し得る。其ワニは天つ神を奉送して功を樹て、サヒ持の神とまで稱せられた。研究の順序として私は前者の記事から抄錄する。

『大國主神の兄弟、八十神坐しき。然れども、皆國は大國主神に避りまつりき。避りまつりし所以は、其八十神各々、稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて、共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲神（大國主の別名）に袋を負せ、從者として率て往きき。こゝに氣多の前に到りける時に、裸なる菟伏せり。八十神其菟に言ひけらく、汝、爲んは、此海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏してよといふ。

『故、其菟、八十神の敎ふるに從にして伏しき。こゝに其鹽乾くまにまに、身の皮悉に風に吹き析し故に痛みて泣き伏せれば、いやはてに來ませる大穴牟遲神、其菟を見て、何由汝泣き伏せると問ひ給ふに、菟答さく、僕、游岐島に在りて、此地に度らまく欲つれども、度らむ由なかりし故に、海のワニを欺きて言ひらく、吾と汝と族の多き少きを競べてむ。

『故、汝者、其族の在の悉率て來て、此島より氣多の前まで皆列伏し度れ。吾其上を蹈て走りつゝ、讀み度らむ。是に吾族と孰れ多きといふ事を知らむ。かく言ひしかば、見欺へて列伏せりし時に、吾其上を蹈みて讀み度り來て、今地に下りむとする時に、吾汝は我に見欺へつと言ひ竟れば、卽ち最端に伏せる和邇、我を捕へて悉に我が衣服を剝ぎき。此に因りて泣き患ひしかば、先だちて行ましゝ八十神、海鹽を浴みて風に當り伏せれと誨へ給ひき。

『かれ敎の如せしかば、我が身悉に傷はえつと告す。是に大穴牟遲神、其菟に敎へ告はく、今急く此水門に往きて、水以て汝が身を洗ひて、卽ち其水門の蒲黃を取りて、敷散らして、其上に輾轉びてば、汝が身、本の膚の如と、必ず差なむものぞと敎給ひき。故敎の如と爲しかば、其身本の如くになりき。……其菟、大穴牟遲神に白さく、此八十神は、必ず八上比賣を得給はじ、袋を負ひ給へれども汝命ぞ獲給ひなむと白しき。』

二、マレイの傳說

此傳說の菟は、之を『稻羽の素菟といふ者なり』と古事記には書いてある。然るに其稻羽の國にも、波斯

灣にもワニが生存せぬものとすれば、此傳說は他より渡來したものに相違ない。現に是れと全然同一な傳說がマレイ地方にある。

× × ×

さて然らば、マレイ人社會に古來言ひ傳へられた傳說とは如何なるものであるか。それは、有名なる『鹿の物語』(Hikayat pelandok) に出て來るワニに關する一說である。それは次の如くである。『鹿さんは、かくて或る川の岸に達しました。その向ひの岸に一本の木がありまして、其本に澤山の果物のあかあかと熟したのが、なつてゐました。いかにもおいしさうに見えました。その果物は猫目の樣なものでありました。そこで鹿はその果物を食べたいと思ひましたが、どういふ風にして川の向側に行くかといふことを考案せねばなりませんでした。

そこで暫く考へて居ましたが、彼は遂に椰子の果を取つてきて、その川に立つてゐる一本の杭の上にのぼり、次の樣に叫びました。「お前達、ワニども皆んなよ、川面に浮んで來い。そして此處から向側まで一列に並んでくれ。自分はソロモン王から命を受けて、お前達皆を數へに來たのだ。」その言葉を聞いて水中のワニ達は全部、浮き上りました。小さいのも、大きいのも、男も女も、皆浮び上りましたので、此方側から向岸まで一ぱいになりました。そこで鹿はワニの頭上に乘りました。そして數へ始めて、一ツ二ツ三ツ……ポン……椰子の實で打ちました。これは大きい、これは小さい、と云つて打ちました。男、女、といつてまた打ちました。

かうして鹿は向岸に達しました。向岸に着いて、すぐ岸に飛び上つてワニに申しました。皆のワニよ、お前達はおれにだまされたのだ。何故ならば、自分は此方側へうつり、このマタクモン（果物）を食べたい爲に、ソロモン王がお前達を計へる樣に命じたとあざむいたのだ。お前達は頭をなぐられた。自分は非常に滿足した。これから自分は、おいしい果物を充分にたべられる。チエツ、お前達は馬鹿だ。

こゝで鹿は、その果物を滿足してたべましたが鹿の此言葉を聞いて全てのワニは皆大へん憤慨して、次の樣に申しました。「よし、鹿よ、まゝかお前は、今後水を飲みに川へおりて來る樣なことはなからうな。若し來れば、其時こそ充分にお前をいじめてやるぞ。」鹿はこれに答へて言つた。「そうか、よろしい、若しおれをつかまへられるものならば、ほんとにやつて見てくれ、ワニよ。」(註)

（註）外國語學校教授朝倉氏の特にマレイ語から譯されしものによる

× × ×

このマレイの傳說を我國古事記神話の稻羽の菟の項に比して見よ。如何にも、その出所の同一なるべしとの感を懷かずには居られない。

尙ほ、かうした傳說は東印度地方には多少の變化を持つて樣々に傳へられてゐる。德川義親侯は矢張りマレイ語學者であるが、その著『稻羽の素菟考』中に次の如く記してゐる。

『東印度諸島との交通は航海術の發達しない古代に於ては、恐ろしく困難の樣に考へられるが、その言語の系統は臺灣にまで及んでゐることを思へば、實は民族が案外手近まで來てゐたのに驚く。そこから傳說が島島を傳つて、日本本土に入つてくるのも、さしてむづかしい事ではあるまい。

『東印度諸島の傳說を集めた "Tjeritera Kantjil jang tjerdik" (怜悧な鼠鹿の話) といふ本に類話がある。一九二一年爪哇で發行された本で、著者は Wirapostaka 氏、馬來語で書かれてゐる。物語は次のやうだ。

× × ×

鹿がぶら〳〵と歩いてゐる內に、日が暮れかゝつて、あたりが暗くなり始め、而も雨さへ降りさうになつて來た。家に歸へるのには川を越さなければならないのだが、川は水が一杯で、中々渡るやうなところが見付からない。水の流れが早いから、こわくて徒涉することも出來ない。名案が浮んだ。鹿はその川にゐる鰐を呼び出していつた。「おい、諸君。上流のも下流のも、水上のも水中のも、皆こゝに集つてくれ。地上の生き物の主たるスライマン樣の御命令だ。この悧口な己樣(オレサマ)に、此の川に住んでゐる大小の鰐が、どの位あるか勘定をしろと云つけられた。」これをきいて大小の鰐は鹿の前に集つた。

『これはまあ、どうしたものだ。さう目茶々々に、いそいで集つたつて勘定が出來るものぢやない』と鹿がいつた。『ぢやあ、どうすればいゝんだ。どうでもするから』と年寄つた鰐が答へた。『勘定しやすい樣に、こちらの岸から向ふ岸まで頭を上流にむけて押し合つてならんでくれゝばいゝんだ。尻尾はいらないぜ。脊中だけ出してゐてくれゝば勘定が出來る。』

鰐は大急ぎで川幅にならんだが、まだ鰐は澤山ゐてならびきらない。

『靜かにしてゐてくれ。いゝかい。早く勘定出來る樣に皆の頭を踏み付けて、一、二、三と數へ初めて、おしまいまでゆくのだ。うごいてはいけないぜ』と鹿がいふ。鹿は脊中を跳んで勘定を始めた。『ヒイ、フウ、ミイ、ヨオ、……三十……五十……』とう〳〵向ふ岸にゆきついて一番終りの鰐の頭を蹴とばすと同時に跳び上つて、『諸君、左樣なら、御機嫌よう。脊中を借りたいばかりに頭を踏みつけたのさ。向ふ岸まで橋になつてもらつたんだ。夜になつて歸りたくても川の水が澤山で涉れないから諸君の脊中を拜借して橋にしたのさ。』

鰐は鹿に欺かれた事を知つて、とても怒つていつた。『畜生、よくもだましたな。此の恨は忘れないぞ。貴樣も、また此の川を越す事がない事はあるまい。今度見つけたら丸呑にしてやるぞ』

鹿は『そんならもう此の川を涉らないばかりさ。鰐なんかゐない川をさがすからかまはない。もし水浴が

したければ小さい川で充分だ。おまへとは違ふんだぜ。その醜い頭を隠さなければいけないから大きな深い川をさがすがいゝ。さうでもしないと人間に頭を打たれて死んぢまふぜ』といつた。

鰐は憤慨して、鹿に跳びかゝろうとして川からとび出したが、鹿は早くも見てとつて大急ぎで家に逃げ歸つてしまつた。

× × ×

以上の二物語が同一起源のものであることは、何人も疑はないであらう。こゝに興味あることは、この物語にソロモン王の名が引用されてゐることである。前者には明かにソロモン王となつてゐるが、後者にはスライマン様となつてゐる。スライマンは勿論ソロモンの訛傳であらう。ソロモン王はフエニシヤ人と協同して東方オーフイルに遠征を企てた人であり、また數人のヒツチト婦人を宮中に入れて自分の妃とした人である。(註) パレスチンに於ける諸王中で最も榮華を極めた人で、その威勢が――或は名聲が――東印度の方まで及んだのであらう。この傳説が日本に傳はつて、ソロモン王の代りに大穴牟遲神が置へられたのであらう。本書の研究には極めて重要な資料と言はねばならぬ。

(註) 舊約聖書、列王記上十一章一〇節

三、『ワニ』の語源

然るに今日マレイ地方にては、此生物を『ワニ』とは稱ばない。通常之を『ボワヤ』と稱する。然らば、此傳説は假令マレイ地方から出たにもせよ、ワニの名は他所から出たものと思はねばなるまい。又、埃及王からアツシリヤ王に送呈した時も、之をワニとは稱ばなかつた。卽ち之を『ナムスク』と稱した。故に『ワニ』の名が埃及或はアツシリヤから出たもので無いことが分る。私の考では、前に『神話の地理』の章に説明した通り、ワニの名稱はカルデヤの傳説にある魚神ウアネ(或はオワネス)より由來したものであると思ふ。カルデヤには鰐魚が生息せぬ故に、元よりウワネとワニとは其本體を異にするが、併しカルデヤの文明を學んだヒツチト民族が其傳説中の最大名稱たるウアネを記憶して其移住中の出來事に之を適用したものと解するは極めて自然である。然らばウワネとは如何なる魚神なるか? 此はイスラエルのエホバに當るべき神で、カルデアのノアと稱せらるゝシトナピシチムに方舟の建造を教へ、大洪水に際して之を救ひたる神卽ちエアバニである。エアバニは希臘人に訛り傳へられてウアネス或はオアネスと呼ばれたのである。日本のワニは卽ち此エヤバニのバニから轉訛したものではないか。此エヤバニは、又、ニニギ・アザクと稱せられ

る。ニニギ・アザクとは『學問の主』といふ意味である。（註一）碩學エリゼ・ルクリユは此オアネスに就て記して曰く、

『バビロニヤの傳說によれば、彼の大魚神エア・バニ卽ちオアネスは、第二人類の希望の懸れる救助船を我頭角に繫いで、汎濫せる大洪水を過つて之を一山嶺に導いた。此徵象は確かに重大なる意義を有するものである。此神魚は單に彼の兩大河（チグリス及びユウフラテス）に汎濫する大水上に救人船を繫導せるに止まらない。彼は其諸船をして更に遠方に走らしめて、其必要な產物を求めしめ、之と交易するに我が國の產物を以てせしむることに努力した。かくして人類は、互に其勞働の產物と其腦髓の思想とを交換して互に相了解し互に相助くることを學んだ。』

『かくの如く、彼の徵象的魚神は、換言すればバビロニヤの社會史及び經濟史上に於ける航海と貿易は、此國に於て極めて重大にして、其傳說は偉大なる性質を悉く此魚神に歸した程であつた。彼は人間に敎ゆるに文字と、總ゆる種類の學問と、藝術と、都會建設法と、殿堂の建築法と法律及び幾何の原理とを以てし、播種法と收穫法とを以てした。一語にして言へば、彼は凡そ生活を優雅にし得る總てのものを人類に與へた。「彼の時代以後（オワネスの時代以後）何一つ優れたものは發明せられない。」と稱せられた。（註二）

（註一）巴里大學敎授 Alfred Loisy 氏著 "Les Mythes Babyloniens" 一三九頁

（註二）E. Reclus 氏著 "L'Homme et la terre" 第一卷五一二頁

然るに、日本の出雲、稻羽地方に於て鮫のことをワニザメと稱するのを見て、古事記のワニは鰐ではなくワニザメだと主張する學者がある。けれども私が先年同地方に行つて問質したところによると、ワニとはたゞ大魚といふ意味の形容詞または抽象名詞であつて、鮫にのみ限られた名前ではない。ワニが大魚または神魚を意味するといふ私の考は此點に於ても一層强味を感ぜしめられる。

四、ワニの任務

バビロニヤのオワネスは以上の如く大なる神格を有する存在であつた。とても古事記神話のワニの樣なものでは無い。勿論稻羽の菟との關係に於ては、ワニの生活は極めて平凡である。然るに彼の日子穗々手見命を海津見より奉送したるワニは可なりに重要なる役目を我天孫民族に對して盡して居る。古事記の記事は次の如くである。

日子穗々手見命、兄の命と爭議あり、卽ち海津見大神之に對策を敎へ給ひ、さて、

『鹽滿珠、鹽乾珠、幷せて兩箇を授け奉りて、卽ち悉にワニ共を召集めて問ひ給はく、今天津日高之御子虛

空津日高、上つ國に出で幸さむとす。誰は幾日に送り奉りて、覆ごと奏さむと問ひ給ひき、彼、各己身の尋長の隨に、日を限りて白す中に、一尋ワニ、僕は一日に送り奉りて還へり來なむと白す。故、其一尋ワニに然らば汝送り奉りてよ、若し海中を渡る時、な畏こませ奉りそと詔て、即ち、其ワニの頸に載せ奉りて、送出し奉りき。』

『故、いひしがごと、一日の内に送り奉りき。其ワニ返りなむとせし時に、所佩せる紐小刀を解かして、其頸に著けてなも返し給ひける。故、其一尋ワニをば、今に佐比持の神とぞいふなる。』

右の事實は、アラビヤ或はアフリカの印度洋沿岸に行はれたる事實、又は傳說であらうと思ふ。何となれば其佐比持の『サヒ』は國學者の說に由れば劍のことだと云ふ。然らば其サヒは即ちアラビヤ語の『シュフ』或は『サフ』と同語にして、即ち右の地方の古代語にては此『シュフ』(劍)を『サヒ』と發音したものであらう。又、日子穗々手見命が其兄命と爭ひたる山佐知海佐知の其『サチ』も亦アラビヤ語のサーヂと其語源を同じうするであらう。更に其爭議に關する『高田』『下田』の語も、亦『幸のアラビヤ』地方の事實と見ねばならぬ。何となれば此地方は今より六七千年前に於て既に山岳水田の耕作を開いたもので、實に此傳說の出處として極めて自然に此に想到し得るのである。要するに日子穗々手見命が旅したる處は、『カササ』御前即ち今日のバベルマンデブ邊であらう。右の傳說がアラビヤ或はアフリカ或は更に進んでシンガポールの近傍の事實であることは之を了解し得るであらう。

ところが、茲に一言すべきは、古代の埃及や印度に於ては、ワニが如何に人間に親しみ居りしかといふことである。碩學エリゼ・ルクリュが『地人論』中に記するところによれば、埃及ナイル河に於ける土着人達は、同河に住む鰐に一々名前をつけて置き、鰐の方にても人の呼ぶ名前を自ら記憶してゐて、之に應答したといふ。また印度に於ても、祝祭日などには、鰐を陸上に呼び上げて、その身に裝飾や色彩を施し、人がそれに跨つて水中に泳ぎ戯れるのを常にしたといふ。然るに埃及に於ても、印度に於ても、西歐の白人が來て、むやみに狩獵なぞを試み、親しみ來れる鰐をだまし打ちする樣になつて、鰐は人間から離反し、否却て人間に敵對するほどになつたと言ふことである。されば日子穗々手見命が海津見大神の許を去るに當つて一尋鰐に乘つて海を渡つたといふ古事記の記事は、印度或はナイル地方の傳說として見れば決して不可思議のことではないのである。

五、トーテムとしてのワニ

尙ほ此ワニ就いて一言すべきことがある。其れは、此ワニは鰐其ものでは無くて、鰐を守護神とする部落

或は氏族團體ではないかといふこと是れである。ナイル河の上流なる大沼地の邊に住するデインカ族は、怜悧にして能く發達せる民族であるが、其部落の守護神は極めて多種である。『セリグマン博士の說によれば、其諸部落は各々其守護神として或は獅子、或は象、或は鰐、或は河馬、或は狐、或は鳥類、或は草木類、或は雨或は火を定有した。各部落は其守護神を我祖先なりと云ひ、之を喰ひ咀ふことを愼み避ける。』（註）

（註）カーペンター氏著 "Pagan and christian creeds" 五八頁參照

果して然らば、古事記の佐比持のワニ神と稱せらるゝものも、實はワニを其守護神とする一部落であつたかも知れない。そして傳說者がカルデヤのウアネを之に連想して『ワニ』の名を與へたのかも知れない。かく解する時は、右の傳說は、實際存在せし歷史として解釋することが出來るのである。

第十九章　『天』及び『神』

一、『天』の文字

古事記神話中には『アメ』の文字が非常に多く用ゐてある。そして其意味は必ずしも一定して居ない。例へば『天地の初發の時、高天の原に成ませる神』といふ場合の『天地（アメツチ）』の天（アメ）は卽ち天空のことである。然るに『天の沼矛』『天の浮橋』『天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき』『天の安の河』『天の斑馬』『天の香山』等の天は必ずしも天上の意味では無い。天津神、國津神と相對して、天孫民族と出雲民族とを區別する場合には、天津神とは山岳住民を意味し、國津神とは平野住民を意味するが其高地にも非ず、天上にも非ざる場合の『天』は何を意味するであらう。『天の宇受賣命、天の香山の天の日影を手次に繫けて、天の眞桙を鬘（カツラ）として、天の香山の小竹葉を手草に結いて、天の岩屋戸に汗氣（ウケ）伏せて云々』の天は抑も何を意味するか。私は

古事記神話を讀みつゝ其甚だセミチツク語のアメン（Amen）に類することに氣が付いた。アメンの語は今日通常、語句の終りに付して其前句の意味を承認或は同意或は讃美する場合に用ゐられるのであるが、又、語句の始めに間投詞として或は副詞として用ゐられることも少くない。そして此アメンの語を冠らされたる句或は語は、之によりて其意味を強められるのである。副詞として用ゐられたる場合には『實(げ)にも』或は『まことに』など意味すれども間投詞として用ゐらるゝ場合は、單に其意を強くするに過ぎぬであらう。アメンが他の語に連接してアメノ或はアマノと發音せらるゝは決して不自然では無い。

二、『神』の文字

『神(カミ)』の語は、如何なる意義を以て最初の語原をなせしか、學者は種々なる說明を施して居る樣ではあるがどうも纏まりがつかぬ。或は神(カミ)は上(カミ)といふ意味から轉化したものであると言ふ說があつて、先づ危險少き解釋とせらるゝ樣ではあるが、果して如何。ブラーマにては神をカアマと稱し、パレスチンのモアブ民族では神をカモスと稱するが、其れが我が日本民族のカミとどれ程の交涉があるか、亦是等の稱呼は如何なる沿革由來を存するか、是が更に問題である。

神は或はセミチツク語のハム或はカムから由來したものかも知れない。アブラハムのハム、オルカムのカム等は、カミの語源をなして居るかも知れない。此場合のハム或はカムは人民といふ意味である。古事記神話に八百萬神と書いてある場合の神とは卽ち萬民といふ意味に解し得るが、さすれば右のハム或はカムと一致することゝなる。

パレスチンの北方シリヤの地を、カムと稱する。カムは卽ちシリヤの別名である。ヘブリユウの創世記にはノアの子にヤペテとセムとカムの三人があつたと記してある。カムがシリヤの別名となつたのも實は此舊約書から由來したものに相違ない。其は兎も角も、我が天孫民族の別名なりと信ずる彼のヒツチト卽ちヘテ民族は、舊約創世記の記者によるとカムの子供である。そして其盛時にはシリヤに大帝國を建設した。『神(カミ)』といふ名稱は或は是より由來して居るかも知れない。卽ち『カム』は民族の總稱であつて、八百萬の神とは總ての『カム』民族といふ意味になりはせぬか。神武天皇は『神(カム)ヤマト、伊波禮毘古』と稱ばれ給ふたが、其『神』はカム民族のことにして、ヤマトは山人といふことであらう。

古事記には、『神』は決して宗教的崇拜の對象になつて居ない。古事記に出て來る總ての人格者は悉く是れ『神』である。神或は命である。そして古事記には神と命とは全然同意味の用語になつて居る。イザナミの命は同時に神とも記されてある。猿田彥神は同時に猿田彥命である。要するに神は同時に命であつて、而し

て些かも宗教的『神聖』の意味を含んでは居ない。

神が『上』の意味を有することは今日に於ては爭はれぬことであらう。併し其れは神の語が上といふ意味から起つたといふ論據にはならない。寧ろ、上といふ語に崇高の意味を添へる樣になつたのは後のことであつたらうと思ふ。

花を見る心はよそにへだたりて
身につきたるは君がおもかげ　（西　行）

第二十章　ロアジ教授の意見

一、著者の希望

私は一九二〇年八月、愈々巴里を立去るに當り、我が信ずる處を一專門家に語りて、其教を乞ひたいと思ふた。そして其事を舊友ボオル・ルクリユ氏に問ふた。最初私は古代史の大家ライナツク博士に紹介して貰ひたいと思つた。所が同氏は折惡しく巴里に在らず、其意を得なかつた。そしてロアジ教授ならば面會することと最も易からんとのことであつた。ロアジ氏はソルボンの教授であるが、其專門は古代史といふよりは寧ろ神話學及び神學にある。併し其れでも大家の教を受くることが出來れば甚だ幸ひであると思ひ、ルクリユ氏と共に訪問した。所が同氏も不幸にして暑中休暇中を田舍に暮らすべく出發したとの事であつた。已を得ず私は次の十二箇條を手記し、其れにルクリユ氏の紹介書を添へて之を郵便に托することゝなつた。

私はロアジ教授の答書を、歸朝の途上、ブルツセルの客舍にて受取つた。そして其返答は、後段に掲げたる如く、寧ろ否定的であつた。私は直ちに折返へして一書を認めようと思ふたが、何分英國へ渡るべき準備に忙殺されて居たので其意を達し得なかつた。

私はロアジ教授の否定的返答によりて決して失望しなかつた。第一ロアジ教授が要求する條件の一部を私は持つて居るからである。第二、神話學者たるロアジ教授の返答は、太古史其ものゝ事實を餘りに無視して單に神話傳說にのみ蹋躇して居るの嫌ひがあるので、私の問ひし處と教授の答へられし點とは隨分齟齬して居るのである。

併し、ロアジ教授の極めて親切なる訓告は私に取りては實に有益なる示針となつた。そして其爲に新たに發見したる處も頗る多いのである。故に私は左に、私の覺書と、ルクリユ氏のロアジ氏に宛てたる手紙と、ロアジ氏の返書とを全部譯して揭げることにした。

二、著者覺書

日本古事記神話は、之を二部に分つことが出來る。創生記及び移住記、是である。私は今其移住記に就いてのみ記する。

何故に私は、日本神話が其源をカルデヤ、パレスチン、及び其近傍に發せり、と考へ始めしか？

一、日本民族移住の約束の地は『豐葦原の中つ國』と稱せらるゝが、日本に斯の如き地方が存在しない。私は之れメソポタミヤを指示するものであると信ずる。

二、日本神話中には鰐に關する歷史があるが、此動物は紅海或は印度洋沿岸の外には生息しなかつた。而して此動物は日本傳說に於て『ワニ』と稱ばれ、其音は頗る彼のカルデヤの傳說中に存する『ウアネス』に類似する。

三、移住記の最初の人物、日本帝室祖神の嗣子『正勝吾勝々速日天忍穗耳命』は、彼のパレスチンと小亞細亞との間に一大帝國を建設したるヒツチト人と同族であつたと思ふ。何となれば、『正勝吾勝勝』(個人の名稱に冠らせたる)の語は、之を文字通りに飜譯すれば『眞との勝、吾が勝勝』といふことになる。而して此の『カチ』は『カアチ』卽ちヒツチトであるかも知れない。

四、移住記の第二人物、卽ち『カチ、カチ』の子は、實際に移住した。而して其移住の案內者を『猿田彥命』と呼んだ。私は此嚮導者を以てカルデヤ人或はカルデヤ人の團體なりと信ずるものである。蓋し『サルダヒコ』はサルダの子を意味し、サルダは卽ちカルダである。而して『ノ命』は『ノ團體』(或は尊號)の外

に解釋することが出來ない。

五、此第二の人物『ニニギの命』は山や海を跋渉したる後『タカチホ』に到着して此處に定住した。而して此タカチホはシナイ半島のジエベル・エル・チフである樣に思はれる。蓋し『タカ』は高或は嶽を意味し、タカチホをアラビヤ語に譯すると『ジエベル・エル・チホ』となる。此山の固有名詞は三千年來、單に『チホ』が『チフ』と變じたに過ぎない。

六、ニニギの命はカラ國を横斷つた後に『カササの前』に行つた。私は此カラ（空）國を以て砂漠なりと信ずるものである。そして此砂漠は卽ちアラビヤの砂漠であらねばならぬ。日本には砂漠を存しない。私はアラビヤの地圖中に『カササの崎』の名を發見しない。併し私は、此崎はどうしても紅海或は印度洋の沿岸にあらねばならぬと思ふ。蓋し鰐の事件が傳へられたのは實に此處である。『カササ』は或は『カツ・サダ』（註）を意味し、從て彼の『幸のアラビヤ』を指すことゝなりはせぬか。

（註）カツは渴、サタは幸

七、チホ山及びカササの崎はツクシの國にある。其『ツクシ』の『ツ』は屢々『對』或は『對立』を意味する。されば『對クシ』とはカムの子供のクシ等が生存したる紅海兩沿岸のことであると解することが出來やう。

八、『まことの勝』の叔父、日神の弟、ツキヨミの命は、オス國を統治すべく指定された。此オス國は彼のコウカサス山脈の中央に生活したるオス或はオセツト人の國といふ意味ではあるまいか。且其オス國の語には『夜の』文字が冠らされて居る。而してカウカサスの彼方の國を南方の住民は呼んで『夜の國』と云ふた。

九、『まことの勝』の移住の初めに於て、彼はメソポタミイ或は其近隣に住する同類民族に出會した。そしてカチの方から此民族の首長（大國主と稱す）に對し、此約束の地に關して談判した。さて此大國主はコシの國に旅行をした。此『コシ』といふ字は日本語では『越す』といふ意味を有し、コシの國は越すべき國といふ意味になる。私は此コシの國は卽ち彼のコセ或はコセアンの國であると思ふ。卽ち歷史開闢の時より今日に至るまで彼のザグロス山中に住居する處のバクチアル人であると思ふ。

十、移住の以前に於て、吾が祖先は『タカマのハラ』に生活した。（註）

（註）日本の國學者は之を單にソラ（空）と說明する

日本語では『タカ』は通常『高』であるが、併し又山をタケ或はダケと呼ぶ。又、タカマの『マ』は間或は中間を意味する。ハラは卽ち原である。されば『タカマノハラ』は山間の平野といふことである。そして其平野はどうしてもシリヤの北方に位せねばならぬ。果して然らば、『ハラ』は彼の『ハラン』の地を指示す

るものといふことは出來ないであらうか？

十一、ノエの子『カム』の名には、何か意味を存するか？　日本語にては神話の神を『カム』又は『カミ』と稱する。併し又時には、此『カミ』を『人民』といふ意味に解することも出來る。『カム』（註一）『アブラハム』『クム』（註二）『カミ』等の諸語の間には何等の關係をも存せざるか？

（註一）　ヒッチトの祖

（註二）　アラビヤ語の人民

十二、カムの子『スバ』の名には、何か意味を存するか？　アラビヤ語にて『スアバ』は雲である。スバはアラビヤの東南部に住居した。其地方は毎朝雲霧に潤ほされ、從て其住民は雲を崇拜したに相違ない。

×　×　×

左に掲ぐるは前段に掲げたる著者覺書の原文である。併しこれはロアジ教授に讀んで貰つたものでは無い。ロアジ教授へはルクリユ氏が此文に基いて自ら清書したものを送つたのである。本文には定めし多くの誤謬もあらうし拙劣を極めたものと思ふが、今は訂正されたものを手に入れる事が出來ない。是を公けにするは少々恥かしけれども、ロアジ教授の返書と相對せしむる爲めに、遂に掲載する事にした。

欠

三、ロアジ教授に宛たるルクリュ氏の手簡

教授足下

別紙は日本の一學究石川氏がカルデヤ及び日本の神話に就きての覺書でありますが、之に對して一瞥の勞を賜はることが出來ませうか？

小生はブルスセルに於て宗教進化論を講じたるエリイ・ルクリュの一子でありまして、學者としての貴下の御雷名は豫て承知して居りました。若し別紙御一讀の上或は此友を御奬勵下さるなり、或は彼の進路の誤れるものとせば其事を御告げ下さるなり、致し下されば眞に望外であります。

石川氏並に小生より申上ぐる深厚なる敬意を御受け下さらんことを。

ポール・ルクリュ

× × ×

猶、ロアジ教授に宛てたるルクリュ氏の紹介書原文は次の通りである。

ロアジ教授の意見

欠

12 Rue Gamneron Paris XVIII Le 30 juillet 1920

Monsieur le professeur, Vous conviendrait il de jeter un coup d'oeil sur la note ci incluse d'un lettré japonais, Mr Ichikawa, au sujet des mythologies chalde'enne et Japonaise ?

Le soussigne, fils d'Elie Reclus qui professa l'evolution des religions a aBruxelles a appris à respecter votre nom de savant et il espere que vous voudrez bien soit encourager son ami, soit lui dire qu' il fait fausse route.

Veuillez en tous cas agreer les salutations tres respectueuses Mr. Ichikawa et de soussigne.　　Paul Reclus

四、ロアジ教授の返書

足下、

御送附下されたる手記を正に拜見いたしました。で、私は先づ告白しいたします。御友人學者の御推測には未だ感服せしめられぬことを。日本神話とセミチック神話とが共同の起源を有すると言ふ假定を立つるには、單に偶然なる言語の接近や、又他人種の國語を當てはめても同樣な結果を得る樣な類似語の存在のみでは、未だ充分とは言はれません。其傳說の上に根本的の一致を存せねばなりません。バビロンの神話的傳說と創生記の數章とに一致の出發點を承認し、或は承認せざるを得ざる理由も亦同樣なのであります。卽ち兩者は共に洪水の歷史を有し、又洪水前に就いて同一思想の歷史を存するのであります（例へば、人類が神に使へん爲に神によりて造られしこと、洪水前のゼネラションの確定せられしこと、非常なる長命、及び總てを下流メソポタミヤの事件とすること）此外、尙ほ移住の傳說がある、卽ちアブラハムをしてカルドからハランに、ハランからカナンに赴かしめたる傳說がある。私は日本神話中に些かも斯かる事實を發見しない。其古い神話は、全體に於て、セム人の其れと非常に異なつて居ると思ひます。そして其祖先等がユウフラテスを出でゝ全亞細亞を通過し、極東にまで達したる移住の記念といふものが些かも存しない樣に承知する。

之を要するに、若干語の發音法の類似のみにては、今提出さるゝ如き假定を是認するに不充分であります。ドウしても神話的傳說の根本的類似が必要缺くべからざるものであります。私が右に引用したる聖書中には其洪水の勇者は、バビロニヤの傳說に於けると同樣の名を持つては居りませぬ。が併し、其基礎的傳說は、最初の神の告げから、鳥の送致に及び、更に神の恩赦の爲の犧牲の件に至るまで同一であります。されど小生は、御友人が其比較探究を繼續さるゝことが不可なりとは申しません。唯だ其結論を公けにする以前に於て、先づ右小生の申上げたる意味にて自己批評を試みらるゝこと肝要ならんと存じます。

希くば小生の特別なる敬意を御受け下さらんことを。

× × ×

猶、右に掲げたロアジ教授の返書原文は次の如くである。

Ceffonds, le 2 aout 1920

Monsieur

J'ai pris connaissance de la note que vous avez bien voulu m'adresser, et je vous avouerai que je ne suis pas seduit par les conjectures de votre savant ami. Pour fonder une hypothese sur la parenté originelle de la mythologie japonaise et de la mythologie semitique, il faudrait autre chose que des rapprochements verlbeux pris un peu au hasard et qne l'on pourrait faire aussi bien en y mettant la même bonne volonté, avec le langage d' une autre famille humaine. Il faudrait une analogue au fond, portant sur telle légende ou serie de légendes. Ainsi l'on admet, l' on est obligé d'admettre un point de depart commun pour les traditions mythiques de Babylone et certains chapitre de la Genèse, pour que l'on trouve de part et d'autre le même recit du déluge avec une conception analogue de histoire antedeluvienne (humanite crée par dieux pour leur servir, nombre determiné de generations avant le déluge et longévité extraordinaire, le tout localise en basse Mesopoamie); au sur plus il y a une légende de migration bien suivie, qui amène Abraham de Chaldee à Harran et de là en Canaan. Je ne vois rien de pareil du coté des japonais, dont la vieille mythologie me parais, dans l'ensemble, très differente de celle des semites et ne contient pas, que je sache, le souvenir d'une migration qui aurait conduit par etapes les ancetres depuis l' Euphrate a travers toute l' Asie jusqu' à extrème-orient. Pour me resumer en deux mots, l'assonance de quelques noms ne suffit pas pour justifier une hypothese comme celle dont il s'agit; un rapport de fond dans les traditions mythiques serait indispensable. Dans la Bible, que je viens de citer, le heros du deluge ne porte pas le même nom que dans les recits babyloniens; le rapport n'en est pas moins certain pour que le fond des recits est le même, depuis l'avertissement divin au commencement, jusqu' à l'envoie des oiseaux et le sacrifice d'action de graces a la fin. Je ne veux pas dire que votre ami aurait tort de pcursuivre ses recherches et comparaisons, mais je crois qu'il commettrait une imprudence en publiant ses conclusions avant de les avoir critiqué lui même dans le sens que je vous ai dit.

Veuillez agreer, monsieur, l'expression de mes sentiments très distingués.

A. Loisy.

五、洪水及び移住の記事

ロアジ教授の返書は以上の如く懇切を極めて居る、私は是によりて發明する處の甚だ多かつたことを玆に深く感謝する。

ロアジ教授の要求せらるゝ條件、即ち古事記神話とセミチツク神話との基礎的一致、例へば洪水傳說の一致といふ樣なる事實は、私の研究によりては未だ充分精確に說明されて居ない。元來私は古事記神話とセミチツク神話とを比較研究しようと企てはしなかつた。古事記神話は決して純粹の神話では無くて、あの中には多くの歷史的事實が朦朧として存在して居る。又、多くの傳說が、或は半ば忘れられ、或は變改を加へられて、僅かな文書の中に集められて居る。

例へば、洪水の傳說とも見るべき箇條が古事記神話にも無いでは無い。彼の

『天つ神諸の命以て、伊邪那岐命、伊邪那美命二柱の神に、此たゞよへる國を修理固めなせと詔りごちて天の沼矛を賜ひて、言依し賜ひき』

といふ一節の如き、洪水の傳說が單純化して傳へられたものと見られぬことも無い。勿論其思想はカルデヤの洪水やヘブリユウの其れと大いに異なつては居るが、併し長い旅行をして極東の島國に到着するまでの間に多くの附加的思想は忘れられて單に水の汎ようたといふ事實のみが記されたものである、とも解釋が出來る。洪水の傳說もカルデヤにては人類懲戒的の意味は少しも無いが、其れがヘブリユウに傳へられると、宗教的懲罰の意味が附加せられて原始的純朴の氣風が失はれて居る。之れに比すれば、古事記が單に『たゞよへる國を、修理かためなせ』と記せるは、頗る單純にして原始的思想がたゞよつて居る。支那に於ける禹の洪水の傳說の如きも、決して人類懲戒の意味を含んでは居ない。古事記の記事と禹の洪水とは或は同じく其傳說の源をカルデヤに發して居るかも知れない。支那には其初發の文明が黃河流域に起つたので、其の洪水は傳說に非ずして、歷史的事實なりとすることも出來るが、日本古事記の『たゞよへる國を修理かためなせ』の文字は之を他國の傳說より來たものと見ねばならない。之を直ちにカルデヤより來れるものとなすには餘りに單純だと云ふ非難もあらうが、併し長い旅行の間に、傳說が大分磨滅したのだと解することも出來る。此事に就いて最初ロアジ氏に問はなかつたのは、私の研究を移住記の部分に限る積りであつたからである。そして右の『たゞよへる國』の記事は古事記の創世記の部に屬するので、私は之を第五章に於て略叙して置いた。

尙ほ右の如き例は、建御雷神や、思金神や、御井の神の傳說にも現はれて居る。建御雷神はシナイ地方に

存したる雷電の神エホバであると思ふが、古事記には單に『建御雷神』といふ名を時々引用するのみで、其性質も役目も表はれて居ない。思金命は神話中に可なりに活動して居て、其性格、職分は極めてモオゼに似て居るがソレでも彼のイスラエル移住に當りて大役を勤めたるモオゼの記事に比すれば頗る單純である。大國主神の庶子とアブラハムの庶子とは共に棄兒になつて『井』に緣あることになつて居るが、大國主神の子は唯だ『御井の神』と稱せられたとあるのみで其何故なるかは分明しない。然るに舊約聖書の記事は、頗る精細に、アブラハムの子が井水によりて救はれ、『神彼れと共にある』の順序を記して居る。(註)

(註)　第十四章第四大國主神參照

ロアジ教授が私に要求せらるゝ日本民族移住の記事は古事記中に可なりに多く存する。ニニギの命が其の石位を離れて、筑紫の日向の高千穗に赴かれたるを振り出しに、同命は更に旅して笠沙之御前に進み給ふた。又、其御子の日子穗々手見命は鹽椎の神の謀議に從ひ『即ち無間勝間(マナシカツマ)の小船を造り』て海神の國に渡航し給ふた。次で其御孫の神倭イワレヒコノ命は頻りに移住を續けて居る。前にニニギノ命の條には『筑紫の日向』とあるのが、イワレヒコノ命の條になると『日向より發して筑紫に幸御(イデ)ましき』となり、其地理的觀念は全然異つて居る。同じしく筑紫と言ひ、日向と記するも、其實際の地位が變はつて來たことを察せねばならぬ。高千穗の如きもニニギノ命が始めて定住せられた處と神武天皇の宮居の場所とは大いに異なつて居ると思ふ。

又、神武天皇以下數代の天皇の治世に關しては、歷史に何等の記事をも存しないが、此數代は或は單に移住に費やされたのかも知れない。之を要するに、古事記の神話は、可なりに長い民族移住の旅程を、讀者に想像せしむるだけの記事を存して居る。

以上に記する理由によりて、我が古事記神話はロアジ教授の要求する條件を不完全ながら具備するものである、と私は信ずる。而して古事記神話の研究は、太古バビロン地方の歷史や傳說の研究によりて益々新たなる光明を得ると同時に、更に太古バビロン地方の歷史研究に對して新たなる材料を供するものである、と私は信じて居る。

第二十一章　結論

以上二十章に亘りて叙述したる私の研究の結果は、尙ほ甚だ不完全であつて、又、斷片的ではあるが、兎も角も、從來日本の諸學者が解釋しなかつた、或は注意しなかつた事實に對して、些か新たなる說明を施した積りである。併し、私の以上に叙せし處は尙ほ研究の初步に過ぎない。彼の古い文書、彼の古い文書が傳へる處の更に古い事實であれば、之が研究は容易なことでは無い。古事記自體が既に千二百年以前に書かれたものである。而して其千二百年以前に編纂されたる書中に存する歷史は、既に幾千年かの年月を經たものである。之を明瞭に解釋することの困難なことは元より當然のことである。

古事記の記事、殊に其神代記中には、多くの異なりたる時代、多くの異なりたる地方、の事實と思想と傳說とが、雜然として不統一に集められてある。併し其爲に之が解釋は頗る困難ではあるが、其興味と眞實味とは却て津々として盡きざるの感あらしむる。ヘブリユウの傳說神話の如く、道德的批判或は宗敎的偏僻を

以て之を書かれなかつた爲に、却て多大の人間味、粗朴な原始生活味が、我が神代記には溢れて居る。是れが實に古事記神話の尊い處である。私が古事記を愛讀して來た理由も玆に存する。

古事記神話全篇に通じて表はれた精神は、これを一語にして曰へば『無邪氣』是れである。古事記神話には、太古のカルデヤやパレスチン地方の傳說や歷史が挿入されて居ると著者は信ずるが、併し、之を傳へるに當り、彼のヘブリユウ人の如く或は宗敎的偏僻や道德的批判を加へ、或は之を修正しなかつた。寧ろ之を單純化して或は之を原始化（と言ふ語が意味をなすとすれば）して古事記中に編入した。又、古事記中には移住の途中に附加せられたと思はれる傳說が可なりに多く、而して其れは餘りに重要ならざるに係らず、却て詳細に記されて居る。蓋し是れは能く其傳語者の心理を自然に表示したものである。

私は天孫民族移住の道筋は印度洋支那海にあつたと信ずるものであるが、本書は未だ其完全な研究を示して居ない。併し、東印度諸島に傳はるワニの傳說によつて、パレスチンやカルデヤの傳說と古事記のそれとの連絡だけは漸く明知し得るに至つた。

古事記神話の新研究　終

昭和八年四月十二日印刷
昭和八年四月二十日發行

【定價金貳圓六拾錢】

古事記神話の新研究

著作者　石川三四郎
東京市日本橋區本町二ノ一
發行者　草深九万一
東京市日本橋區本町二ノ一
印刷所　鷲峯社

發行所　東京市日本橋區本町二丁目一番地　曉書院
振替東京七三八二七番・電話日本橋一九五六番

外416
う

曉書院の新刊書

石川三四郎著
歴史哲學
近刊

加藤一夫著
農本主義（理論篇）
定價一圓五十錢
送料十錢

加藤朝鳥著
最新思潮展望
定價一圓四十錢
送料八錢

バアナアド・ショウ著
加藤朝鳥譯
神を探す黑人娘の冒險
定價一圓五十錢
送料八錢

フランク・ノリス著
犬田卯譯
オクトパス
定價一圓八十錢
送料十錢

終